

第六回「文芸思潮」エッセイ賞 発表

文芸思潮 第6回 エッセイ賞

二〇一〇年度第六回「文芸思潮」エッセイ賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございます。今回は応募者の方々に応募審査料の御協力を仰いだにもかかわらず、五四九篇の作品が寄せられました。厚い御支持に深く感謝申し上げます。中学生から八十歳代までと、幅広い年齢層にわたったばかりでなく、地域的にも南北アメリカ大陸、ヨーロッパ、アジアと世界的な広がりを得、さらに中国人、韓国人の方々からも御応募をいただき、多彩さをいっそうました今回のコンテストでした。

例年の通り、まず選考委員会選担当による第一次・二次選考、続いて第三次選考が行なわれ、最後に選考委員によって最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

今号には当選作および社会批評賞、優秀賞を発表させていただきますが、以後奨励賞、入選作も、できるだけ「文芸思潮」誌上に掲載させていただきますと思っております。御期待ください。

第七回「文芸思潮」エッセイ賞は明年もほぼ同じ要領で募集する予定です。どうぞ奮って御応募ください。

「文芸思潮」エッセイ賞

当選 「虹架かるたびに」

李 湘 (鹿児島県鹿児島市)

当選 「光と闇の狭間」

塩谷靖子 (東京都板橋区)

当選 「生かされた命の役目」

上村和子 (兵庫県神戸市)

特別賞 「酸漿」

武藤蓑子 (東京都多摩市)

優秀賞

「闘病と猫と」 守屋正雄 (東京都町田市)

「ねむれないひめの朝」

羽鳥尚子 (群馬県渋川市)

「死者とダイナマイト」

木戸竜之介 (栃木県黒磯市)

「似た者同士」 矢尾博子 (福井県福井市)

「私の松川事件」

高原万里子 (神奈川県厚木市)

社会批評賞

「オアシスのリハビリ」

六藍光洋 (兵庫県神戸市)

「愛国主義と人種差別」

尹柱鉉 (神奈川県藤沢市)

奨励賞

「ぼあさん、もう一杯」 小田由紀子 (岡山県岡山市)

「四十日の記憶」 堤 京子 (愛知県愛知郡)

「夜半のできごと」 榎並掬水 (広島県広島市)

「カモシカ」 井上幸子 (岡山県津山市)

「血の繋がらない娘」 香川千穂 (オーストラリア)

「魂の虐待」 こぼやしるみ (千葉県千葉市)

「遠景を臨む」 園山 楽 (東京都世田谷区)

「切断了中指」 新井 遊 (岐阜県加茂郡)

「予期せぬできごと」 諸井 淳 (神奈川県大和市)

「NO STEP」の現場から—私たちの日常と言葉

海野 剛 (千葉県鴨川市)

「とくてん」 丸山 史 (大阪府八尾市)

「しじみ蝶の死」 冬枝志織 (東京都杉並区)

「白い鳩になって」 印南房吉 (神奈川県横浜浜市)

「焚き火」 高橋惟文 (山形県山形市)

「種の受け継ぎ」 山本じつお (奈良県御所市)

「二艘の小舟」 近藤 健 (東京都練馬区)

「猫背」 佐久間 圭 (千葉県佐倉市)

「錆びたポスト」 よすみこうすけ (大阪府高槻市)

「ペディキュア」 牧康子（東京都杉並区）

「下駄の音」 八重樫克羅（埼玉県所沢市）

「自分をやりきるぞー言葉の力ー」 坂口保典（長野県小諸市）

「おやじさんの流儀、おくろさんのこだわり」 新井洋一（長野県長野市）

「いもうと」 大島直次（埼玉県新座市）

「小鹿の小道」 池山弘徳（宮崎県都城市）

「祖母へのお礼」 龍口 宏（埼玉県さいたま市）

「オウム教団ヘリコプター調達余聞」 長柄常好（千葉県千葉市）

「チンチン電車」 小笠原幹夫（埼玉県狭山市）

「トラ野菜は大きくなりますか？」 向井初子（神奈川県横浜市）

「影の二人」 天野美和（静岡県浜松市）

「明滅」 今井 夕（東京都豊島区）

「五族協和」の夢破れた音楽家」 西島雅博（東京都三鷹市）

「約束の話」 神夏直樹（石川県金沢市）

「優しい明日へ」 けせらせら（大阪府池田市）

「小さきものへの美」 新保 哲（東京都東村山市）

入選

「ストップウー！」 澁澤 嶺

「陽だまりクラブ」 上杉はるらん

「ほんちゃん」 長野ひろし

「セブンイレブンの女性店員」 高田 望

「ビーチグラス」 ジョバンニ

「田中さんのとうもろこし」 中田澄江

「虹の橋のたもとで」 新田義則

「父の子守唄」 保坂千鶴子

「檻の中の同性愛」 桐ヶ谷忍

「あいさつ」 佐藤幸枝

「因縁話」 山本憲明

「冥界からのメッセージ」 川口正浩

「野鯉釣り」 伊藤伸太郎

「米を借りに来た少女」 藤井典央

「未知なる病、化学物質過敏症と闘う」 佐藤義弘

「桜」 川端直美

「陽だまりロードウォーキング」 大淵 勇

「戦争遺跡―日吉海軍地下壕のなかで思う―」 野上 卓

選評



みかみ ひろし

作家 1945 山梨県甲府市生まれ
法政大学中退
1982 「三日芝居」で
すばる文学賞受賞
著書「三日芝居」
「花供養」
「月と五人の男」

文章の健全さについて

三神 弘

当選作の李湘「虹架かるたびに」は、「虹を見る喜びを
思い出した」という「私」が、「奇跡」の「双子の虹」を
発見したり、「虹探し」をするお年寄りに出会ったりし、
やがて、「虹の架かるところはみな故郷」と眩くというも
ので、読者には、「虹」に託されたものが何であるのかは、
容易にわかる。しかし、そうした解釈はともかく、この作
品では、まず、「私」が立っている場所に案内され、空を
見上げ、「私」が見ているものを見、捜そうとしているも
のを一緒に捜す、という心地にさせられる。

「みな、いのちの持ち主」 美杉

「岐路」 吉田 詢

「雨あめ、降れふれ」 箱寫一郎

「長い夜」 大島武弘

「受付ライフ」 受付ママ

「Kの一生」 苑田有子

「喋る」 大川玉子

「ミツバチか蟻」 萬野かおり

「私って誰？」 佃 陽子

「忘れられないお礼」 五十畑潤一

「早とちりの美学」 岡本政信

「氷解」 素月三綱

「死の淵よりのよりの生還」 小佐美智子

「縁のなかつた赤い靴」 林 須磨

「テレビがやってきた」 花田悦子

「父子」 夏目由美子

「二つの異質な昔話、『ツルの恩返し』から」 佐山広平

「放任主義という名の籠」 天津香々美

「ほめ殺し」 荒木田幻

「冬のみズーリ」 藤沢 祐

「熟年者からのお礼」 田桐 勲

社会批評賞入選

「広島平和記念資料館に行つて」 アライテルヲ

「生命科学の進歩に思う」 小田川豊夫

素材で、無垢だといえればそれまでのことだが、それならば、人間をごくごく普通のこころの状態に立ち返らせることは大事業ということになり、理想とも呼ばなくてはならなくなってしまう。

当選作の塩谷靖子「光と闇の狭間」は、「闇」についての洞察で、「実際の光は届いていないのだから、物理的な意味では闇と言えるのかもしれないけれど、感覚的には闇ではなくたっていくのだ」とし、「光と対極にある闇」ではない世界に導いていく。何よりも文章が洗練されていて、したがって読者は、光と闇の意味や、誤解の是正ということを超えて、ものを見るところということ、あるいは意識の在処についても、示唆を受ける。

当選作の上村和子「生かされた命の役目」は、題名の、祈りのような問いかけにふさわしく、家族の苦難の歳月が綴られていく。小説の題材になりそうな出来事や時間がたちまちに過ぎていくが、貫かれているのは、どのような境遇、事態であろうと、人間としての生き方を持ち続ける態度であり、それ故の悲惨さである。

母は大陸から引き揚げてきたのだが、「私」は「母の痴呆が進めば進むほど」に「引き揚げ時に出産し残してきた次男」を捜さなければならぬと奔走し、ついに「奇跡の身元判明者となった」とも明らかにされる。

そして、兄は妻を伴い家族に会いに来るのだが、その場

なかにあっても、たとえば、グミが実をつけ、子供達を潤したということへの着目は、健全であり、美しくもある。なかにあっても、たとえば、グミが実をつけ、子供達を潤したということへの着目は、健全であり、美しくもある。



いがらし つとむ

- 1949 山梨県生まれ 像群賞受賞
- 79 「流瀆の島」小説で読売賞
- 98 「緑の手紙」NTTプリンター主催第1回文芸賞
- 2002 「鉄の光」で健友館文学賞受賞

国際化と日本語

五十嵐 勉

今回も多数の優れた作品が寄せられ、充実したエッセイ賞コンテストとなった。第六回の特徴は、国際化である。

日本人が海外へ旅行や仕事で出かけ、また居住したりして、異質な風土や文化に触れて新しい体験や感動を得る作品はこれまでも多くあったが、それに加えて今回は外国人が日本語で書いたエッセイを寄せ、それが当選し、社会批評賞にも選ばれた。これは今までになかったことである。大相

面は、「誰かも判別できない母なのに、母は、お母さん、遅くなりましたと手を握る兄をじっと見つめ涙を流し肩を震わせ抱きしめ」た、と描かれる。痴呆の母も、DNA鑑定で身元の判明した次男も、ここでは、痛ましいほどに、生き生きとしている。作品は、家族が直面した幾つもの困難と、これ乗り越えてきたこととで展開していくのだが、家族とは何かという、今日という時代の、解きようのない問題も提出している。

奨励賞の堤京子「四十日の記憶」は、「八歳の私は戦時中とはいえ、楽しく夏休みを過ごしていた」という日々を振り返る。「いつ空襲があるかわからないから、遠くまで遊びにいけない」ので、空襲がないときには、ゴムとび、なわとび、かくれんぼをしたりする。遊びに飽きれば、大きなグミの木の下のにもぐり込み、「寝ころんでグミを食べる楽し」い、居場所もある。突然の空襲警報に、「グミを飲み込んだ」ともいう。

ひもじさに耐えかねキュウリを食べたことから、下痢と高熱で苦しむが、「家族は口をつぐみ」家の外に漏らさぬようにし、母は秘かに、漢方薬に詳しい人を訪ね、「草の名前を覚えてもらって来た」ともいう。こうした戦時中の日々を、作者は「八歳の子が見たものは、六十四年過ぎても記憶から消え去らない。しかし最近では、心なしか懐かしくさえ思うときがある」と、結んでいる。戦争の残酷さの

撲も白鷗、把瑠都、琴欧州など伝統スポーツに外国人が主役として活躍する時代であるが、日本語エッセイに外国人が書いた作品が日本人作品を凌いで受賞するという現実は、日本語とは何かということをあらためて考えずにはいられなかった。

当選作・李湘氏の「虹架かるたびに」は、日本留学を経、さらに日本での国際交流の場で苦闘する筆者が、虹の美しさに感動し、それを日本人の虹の写真を撮る老人と共有する話だが、自然の壮麗な美しさを前に、国や国籍を超えて、大きく湧き起こってくる胸の震えが、素直に表現されていて、今回の全応募のなかで最も真つ直ぐな感銘を覚えた作品だった。これは筆者が故郷を離れて国際交流の苦闘の渦中にあり、つねに「国際交流は可能か、なぜそれをなすべきなのか」という問いを自身に投げかけ、迷い、模索しているからこそ、出現してくる自然の美しさであり、この虹の美しさの中にこそ、その答えがあり、声がある——一つの啓示に繋がっている構造が立ち上がっていた。故郷と日本を繋ぐ何かがここには確かにある。唐詩の大きな空間性も想わせる、気持ちがいい優れた作品である。

同じく当選作・塩谷靖子氏の「光と闇の狭間」は、我々の気がつかない世界を照射して意表を突く視点が鮮烈である。文章も緊密でいい。ただ、終わり方が物足りない。積極的な何か、その先に進む鋭角な姿勢が感じられれば、も

ことであり、その意味で、エッセイ賞の枠が外国人にまで広がり、共有の思いが広がるということは、心強い展開と言えるかもしれない。



みずき りょう

- 1942 北朝鮮生まれ
- 99 小説「祝祭」で第16回織田作之助賞受賞
- 2006 小説「お見合いツアー」で第49回農民文学賞受賞
- 07 小説「海老フライ」で第19回労働者文学賞受賞

さまざまなる人生、輝くエッセイ

水木 亮

毎年新しいエッセイに出会えることを楽しみにしている。今回から参加費用がかかるので応募数が減ると予想されたが、五四九編が集まります。中学生から八十歳を越えた方までの、さまざまな人生、輝くエッセイを興味深く読んだ。

寄せられた応募のエッセイは、全体的に質的なレベルが

かなり上がっていることがわかる。しかし欲を言えば、私としては決定的なエッセイとの出会いはなく、来年こそおおいに期待したいと思った。

「生かされた命の役目」 上村和子

最優秀のこの作品は、阪神大震災で危うく命拾いをした「私」が、生かされた命をいかに全うしようと頑張ったかの記録である。まず母親が中国に残してきた兄を苦難の末に見つけ出し、母親と面会させた。

さらに、震災の一月後に産まれた長女の娘が中学生になり登校拒否となる。立ち直らせようと長女と共に対応するのだが、その過程で長女について、今まで物わかりのよい娘と決め込み、彼女を充分抱きしめてやれなかったことが判明する。自分は知らなかったが、孫娘と同じように母親である長女も一時期部活に出なかつたことがあったのだ。

孫娘との苦闘、長女への反省の末、解決の光が見えて来たとき、生かされてきた役目は終わったとほっとする。生かされた命を大切に、必死に生きてゆく姿に力がある。

「ばあさん、もう一杯」 小田由紀子

お酒の大好きな祖父が、戦争の頃の記憶でうなされるようになり、仲間を見捨てた苦い記憶など老いてなおその傷跡は深い。やがて身体も自由が利かなくなつた。大好きな酒をこぼして泣く祖父。孫の立場からそういう祖父をやさしく見つめているまなざしがとてもいい。

「私の松川事件」 高原万里子

松川事件について、真摯に取り組んでいて好感がもてる。「オアシスのリハビリ」六藍光洋

オアシスに関する、一般に知られていない情報にとっても興味をひかれる。誰も知らないことは、小説であれエッセイであれ楽しい。

「トラ野菜は大きくなりますか」 向井初子

「ドライアイスはお使いになりますか」を「トラ野菜は大きくなりますか」と聞き違いました。加齢は聞き違えをもたらず。微笑ましいエッセイである。

「陽だまりロードウォーキング」 大淵 勇

妻が亡くなり、ウォーキングを楽しむ中から見えてくる世界が描かれる。森から学ぶこと、弱肉強食の自然界のありようなど、老後を前向きに生きる姿勢がいい。

「焚き火」 高橋惟文

今や問題の多い北朝鮮であるが、敗戦で日本人の引き揚げは筆舌に尽くしがたいものであった。金や数少ない持ち物を掠奪する朝鮮人もいた。そのなかで「夜道は難儀だろう」と日本人の難民に焚き火を焚いてくれ、やさしい声をかけてくれた人も居たという。

私たちは人間を信じたいと思う。筆者は死の宣告をうけながら人により助けられた。ゆえに帰国してもがんばられたのである。私もまたその時の難民の子供の一人である。

エッセイ賞 選評

「種の受け継ぎ」 山本じつお

大きなオタマジャクシと小さなオタマジャクシが、水の少ないところで食うか食われるかの闘いをしている。そこに水が無くなったのは、農家が蛙の鳴き声がうるさいという人のために、田んぼの水抜きをしたからである。食い合うオタマジャクシの残酷さにその場を立ち去る。後から思い直して再び闘いの場所を訪れるとオタマはみな死んでいる。時を経てやはりオタマを助けるべきであったと反省する。生き物へのやさしい気持がいい。

「闘病と猫と」 守屋正雄

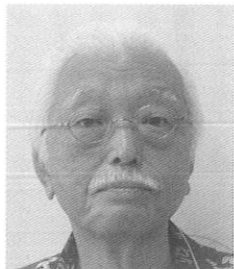
猫を置いて入院した男性の話。猫を世話する者がいないその間が気になる。猫との再会は感動する。居なくなつた猫が戻ってきたり、主に甘え、そしてまた何処かに消える猫。愛すべき猫の話題は尽きない。

「米を借りに来た少女」 藤井典史

小学四年生の女の子が、戦後の食糧難の頃米を借りに来た。その当時村では助け合いが生きていた。そのけなげな少女がやがてホステスになったという。人生の転変を思わせる。

「受付ライフ」 受付ママ

三六歳で本社の受付嬢に抜擢された、その体験談がユーモラスで楽しい。人柄を感じさせるさわやかないいエッセイである。ただこのペンネームは安易でいいだけではない。



ふくおか てつし

1948 山梨県甲府市生れ
樋口一葉研究会員、都留
文科大学講師
著書「評伝深沢七郎ラ
ブソディ」(TBSブリタ
ニカ第3回開高健賞奨励
賞)「遠い散歩近い旅・
山梨文学散歩」(山梨ふ
るさと文庫)ほか
「猫町文庫」編集発行人

読み手を広く想定して

福岡哲司

同世代の者が集まると、自慢するかのように体調や通院の話になる。当事者同士でなければ、ほとんど共感を得られない話題であり、話し方である。旅行やグルメの話を得々と語る者もいる。それこそ食ったことのない餅で、たいてい面白くない。話す相手を想定していかないうえに、普遍性にも欠けるからだろう。

最終選考に残ったエッセイを読ませてもらって、多くの作品に同様なことを感じた。一体このエッセイはどういう世代に読んでももらいたくて書いているのだろうか、そもそも、読み手を想定して書いているのだろうか、と疑問に感じたのである。

個人的な感懐や体験をそのまま書き記せばエッセイが成り立つものではなからう。多くの人間が引き込まれ、しまる以上だったが、抜群に優れたものもなかった。書きなれた者の書くものは表現が独りよがりですまらないうし、若い者の作品には普遍性がない。これは読み手を想定していいいか、きわめて狭い読み手しか頭の中にならないうせいではないか。また、読み手を想定しながら書き直されていない訓示、さもなくば読者のいな、「Twitter」のようなものである。

その中で私の関心を引いた作品を順不同で挙げてみる。当選作である塩谷靖子氏の「光と闇の狭間」の、目の見えるものの想像とは異なり、全盲の人の日常は「真の闇」ではないという主張には説得力を感じた。読んでいて、闇の中に光を見るのはもちろん、光の中にも闇を見るとき、不思議な感覚を感じた。

同じく当選作の李湘氏の「虹架かるたびに」は虹が人と心の通い合いや国際交流のシノニムになっている。淡々とあくまでさりげなく表現されていて嫌味はない。けれども、ユニークさもない。

奨励賞の小田由紀子氏の「ばあさん、もう一杯」は、作者の持ち味だろう、児童文学を連想させるような、ユーモラスにはほほえましい語り口が魅力的だ。が、幅広い読者を得るにはそこに表現上の課題があるように感じる。

同じく奨励賞の榎並掬水氏の「夜半のできごと」は筆者

いまで読み進め、何らかの衝撃を受けては爽快になる普遍的な表現というのは、モチーフのインパクト、あるいは「物」や「事」の珍奇さだけで決して得られるものではない。表現に普遍性をもたらすものはモチーフ、「物」「事」から引き出される書き手の「思い」しかなからう。言っても言わなくてもいいような陳腐な「思い」や、逆に、あり得ないほど突飛な「思い」も言語表現の普遍性には繋がらない。また、幅広い層に受け入れやすい語り口、表現の工夫も不可欠だ。掲載されたものをご覧になれば一目瞭然だが、修練しないで書かれたエッセイというのは、同然にできた小説以上にみつともないものとなる。齢を重ねようが、学歴や経験や地位があるうがなからうが、残酷なことに、同じことである。まして、この場合は仲間内で持ち寄った「文集」ではなく、文芸誌の名の下に実施しているコンテストであれば、なおのことである。

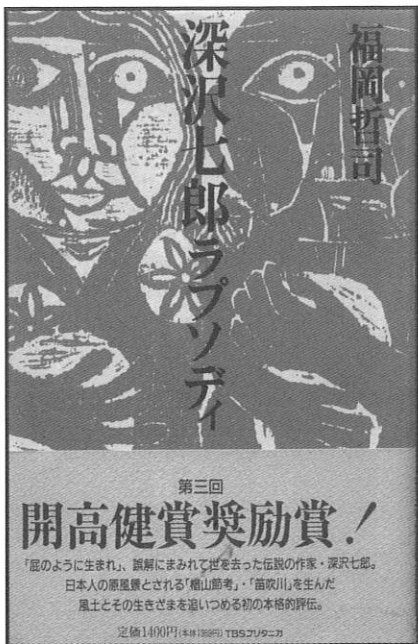
エッセイの修練をすることはどうか？ ひとつには、読み手、なにかなくその反問や表情を思い浮かべつつ書き進めることだ。また、性別や年代の異なる読み手を想定しながら何十ぺんでも推敲を重ねるのである。想定した読み手「彼」たちが眉をひそめれば、大変更の余地があるか、筆を置いて口を閉ざすかだ。そのような自己評価力が必要だ。

昨年に引き続き、最終に残った作品の多くは一定のレベ

お得意の言葉によるスケッチの細かさが持ち味である。ただ、タイトルに象徴的だが、モチーフと表現のバランスがよくないから不必要に大きさに感じてしまう。

同じく奨励賞のよすみこうすけ氏の「錆びたポスト」には心惹かれるものがあつたが、病床にあつた母親の思い出と重なり合う錆びたポスト。両者の関連付けをもっとねばり強く書き込むべきではなかつたかと惜しまれる。

社会的分野の入賞となつた尹柱鉉氏の「愛国主義と人種差別」の韓国人の行きすぎた愛国主義的風潮と人種的排他主義を指摘した勇気を買いたい。ただ、原稿を清書するルールなどの初歩的なスキルはさらに修得すべきだろう。



第三回 開高健賞奨励賞!

「庭のように生まれ、誤解にまみれて世を去った伝説の作家・深沢七郎。日本人の原風景とされる「箱山節考」、「笛吹川を生んだ風土とその生きざまを遠くつめる初の本格的評伝。

定価1400円(税別) ISBN9784780173571

第7回 文芸思潮エッセイ賞 作品募集

文芸思潮では広くエッセイを募集します。日々の暮らしなかでの思い、様々な体験、ユニークな視点、痛烈な批判、残しておくべき重要な記憶・記録など、自由な随筆作品をお寄せ下さい。聞き書きのような、他の人の語りをまとめたものでもけっこうです。短文の世界に言葉の自由な翼をひろげて多くの人に語りかけてください。優れた作品は、「文芸思潮」誌上に発表し、インターネットにも載せて、永く保存します。

文芸思潮エッセイ賞作品募集要項

主旨●随筆文学の顕彰によって文芸創作エネルギーを活性化する。短文学の才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、それぞれの生活に密着した記録を保存するとともに、広く社会に知らしめ、文芸の興隆に寄与する。

募集内容●オリジナルのエッセイ作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数作品応募者は失格とする）

応募資格●不問

応募規定●400字詰原稿用紙5～10枚（原稿用紙使用の場合は必ずA4原稿用紙を使用のこと／B4は失格）。ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を閉じること。

別紙に①応募部門（第7回2011年度「文芸思潮」エッセイ賞応募作品と明記のこと）②タイトル③本名およびペンネーム④年齢・生年月日⑤〒（必ず郵便番号を明記のこと）住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。これらが厳守されていないものは失格となる。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取ったうえで送付のこと（コピー送付が好ましい）。★**応募審査料1000円**を郵便為替などで同封のこと。

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」エッセイ賞係

TEL03-5706-7847 FAX 03-5706-7848

E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞●エッセイ賞■賞状・トロフィー・賞金10万円

優秀作■賞状・賞メダル・賞金3万円

奨励賞■賞状・賞メダル 入選■賞状・記念品 団体賞●10篇以上（新設）

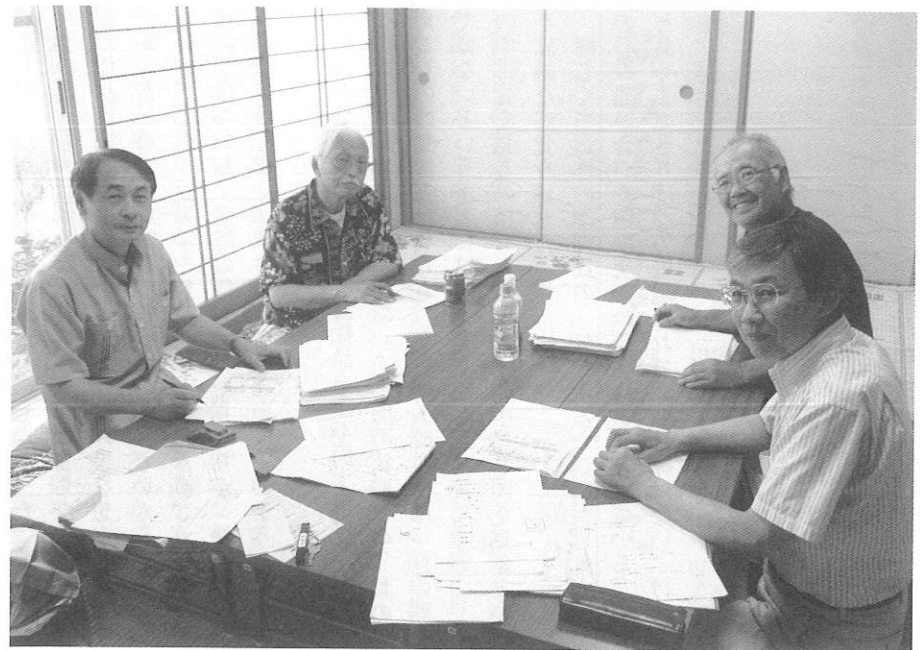
選考委員●三神弘・福岡哲司・水木亮・五十嵐勉

締切●2011年4月30日（当日消印有効）

発表●予選通過者発表は2011年7月末発売の「文芸思潮」41号、またインターネット・ホームページでも行なう。最終発表・受賞作は2011年9月末発売の「文芸思潮」42号（秋号）に発表掲載。優秀作・奨励賞なども順次「文芸思潮」に掲載する。

主催●アジア文化社「文芸思潮」

※主催者から 日々の中に埋もれている強い思いや記憶、味わい深い生活感、残しておきたい体験、矛盾に満ちた人生への痛切な抗議、体験に基づいた現代への鮮烈な視点など、短い文章でなければできないあなたのエッセイ作品をお寄せください。



選考会風景

祝祭

織田作之助賞「祝祭」
農民文学賞「お見合いツアー」

水木亮

水木亮の語作はいずれも農民文学の系譜で、大地から空の雲行きを眺めごとくに、時代の問題を取り上げ、動かぬものと、動くものとを対峙させ、今日を生きるエネルギーに満ちている。 作家・三神弘

すばる文学賞受賞

三日芝居 三神弘

集英社

虹架かるたびに

李^リ
湘^{シヨウ}

人は一生のうち、何回ぐらい、虹と出会えるのでしょうか。

もし私が半世紀先までまだ生きていたら、虹についての思い出の中、一番大切にしたいのは、若い頃、偶然に日本の南国に来て出会った虹のことだと思えます。

私は福建省の小さな村で生まれ育ちました。そして、その故郷から遠く離れた大連にある大学で日本語を習いました。大学三年生の時、徳島県の日中友好協会の招待で、徳島県を訪れました。そこで多くの日本人と親しくなりました。国が違い、言葉、歴史や文化が異なっても、人間は同じ感情を持っていて、本質的に同じなのだと感じるようになりました。

で、慣れないアルバイトをしながら大学に通っていた私は、時折、ひどいホームシックに襲われました。その時のことでしたが、私にとって珍しい体験がありました。

当時、私が住んでいたのは町の景色が一望できる丘の中腹にある三階建てのアパートの一室でした。ある秋の日のことでした。何気なく窓辺を見ると、いつの間にかオレンジ色に映えています。外に誰かが提灯でもかけてくれたのではと思ったほどです。何だろうと気になり、窓を開けてみました。何も見つかりません。がっかりして窓を閉めました。すると、町の向こうの夕焼け空に虹が架かっています。私は雨の多い土地で育ちましたから、そこではよく虹を見ました。しかし、都会に出てからはほとんど見るこゝとがなくなっていました。ところが、この異国の地で、十何年ぶりに、虹を見たのです。そして、虹を見る欲びを思い出しました。この時が、私が鹿児島に来て虹を見た、最初でした。それから、何度も、虹を見えています。

二度目はその数日後のことでした。アパートを出て、ふと遠景を見ると、街中のたたずまいがいつもと違う色をしていました。不思議な、まるで夢を見ているような黄金の色をしています。どうしたのだろう。どうにかなってしまったのだろうか。見回しましたが、わかりません。見通しのよい庭に足を運び、空を見上げて、ようやく、その謎が解けました。虹です。北の海からこちら側の

大学を卒業する前、私が徳島市でホームステイをしていた家庭のお父さんとそのお友達一行が大連に旅行に来ました。そのとき、私は通訳として同行していましたが、ある土産物屋で金銭トラブルが起きてしまいました。そのことで、私の心は長く傷ついていました。このような体験から、私は、将来、日本と中国との関係改善に役立つ仕事にしたいと思うようになりました。大学を卒業後、中国で日本語教師をしていましたが、その時、たまたま目に留まった国際交流員の募集広告に応募しました。そして、幸運にも採用され、鹿児島県に赴任することになりました。一年間の国際交流員の任期終了後、当地の大学で大学院への受験勉強を始めました。家族や友達が一人もいなかった町

丘まで高い空に架かっている長い虹でした。嬉しくて叫びたくくなりました。そばに誰かいたら、きっと、知らない人でも声をかけて一緒にその欲びを共有しようと思ったほどです。

私はそこに佇んだまま、しばらく虹を眺めていました。すると、奇跡が起こりました。北の方向の海へ伸びていた元の虹の左側に、もうひとつの虹が現れてきたのです。最初は自分の目を疑いましたが、しばらくすると、さらに虹の色がくっきりと目立つようになってきました。長さは元の虹の四分の一ほどの小さなものですが、私はすっかり興奮してしまいました。またしても、叫びたくくなりました。この双子の虹を誰かと一緒に見ることができたらどんなに幸せなことかと思いました。しかし、近くには誰もいませんでした。

その双子の虹を見てから一カ月ほど経ったある日のこと、私は大学へ行くため電車に乗っていました。すると、隣に一人のお年寄りが座りました。眼鏡をかけ、優しい顔のお年寄りでした。電車が出発してしばらくしたところ、お年寄りは鞆の中から、何かを取り出そうとしています。私は、思わず、何かと覗き込みました。すると、それはアルバムでした。そこには小さな写真がたくさん繋がっています。しかも、どの写真にも虹が写っていたのです。私は、とても驚き興奮しました。躊躇しましたが、勇気を出

してその人に声をかけました。しかし、気付いてくれません。難聴のようです。私はすぐに紙とペンを取り出ししました。「いつも虹の写真を撮っていらっしやるのですか」と、私は書いて差し出しました。

「そうだよ」彼は小さな声で答えてくれました。「毎日、空を見ているよ。雨が降ったら、すぐ探しに行く」

「私も虹が好きです」と私は再び書きました。「写真は本当に綺麗ですね」

「私が気に入っているのがこれ」と微笑みながら一枚の写真を見せてくれました。「桜島と虹と一緒に入っているのがね……」眼鏡の奥の方で、虹の光のようなものが一瞬見えたような気がしました。

「この前、双子の虹が架かりましたね。その写真はありますか」

「あれは先月の十八日の虹だよ」と言いながら、お年寄りには自信ありげにページをめくりました。「これだね」と、私の前に差し出してくれました。

何とあの日の虹が小さな写真になっていました。私の目に、再び、あの双子の虹が映りました。目頭が熱くなりました。一人寂しく見ていた虹、あの奇跡が、再び私の目の前に現れたのです。私とは異なる場所だけど、同じ時間に、同じ虹を楽しんでいた人が、今、ここにいる。「おいくつですか」

「私はね、八十二」

私は、その歳を聞いて、海の向こうの祖母を思い出しました。すでに他界している祖母ですが、もし長生きしていたら、同じ年になっていたからです。会いたくても会えない、私を愛してくれる故郷の人々のことがなぜか思い出されました。

車内に日本語のアナウンスが流れ、私を遠い別世界から現実へ引き戻しました。目的地に着いてしまったのです。電車から降りなければなりません。

「それじゃ、また」私はお年寄りに会釈をして電車を降りました。

容赦なく電車が遠く離れて行きました。「さようなら」と言うべきだったろうか、「ありがとう」と伝えるべきだったろうか。降りてから気付いて、後悔しました。涼しさを感じる夕暮れ、人が通りすぎる並木道を歩きながら、ふいに涙がぼろぼろ溢れてきました。

「国際人」と自称しながら、心の奥にある「異国人」、「異郷人」としての根強い思いが潜在し、そのわだかまりのあった心の内が、揺さぶられ、崩れていった一時でした。

そのお年寄りとは、その後、一度も会うことができません。その時から、私はいつも空を見るようになっていきます。虹が架かるたびに、あの欲びに溢れ、生気みなぎるお年寄りの顔が目に見えられます。彼、「彼ら」もま

受賞の言葉

李 湘

虹に関わるエッセイを文芸思潮エッセイ賞に応募して、第四次選考通過の通知をいただきましたが、忙しい院生生活の中、意識は遠く離れて、結果発表は忘れかけていました。大学が夏休みに入り旅に赴き、たまたまの旅先で虹に出会いました。虹を見る嬉しさを味わうと同時に、いいことがあるようにという願いを託しながら何か予兆みたいなものを感じていました。家に帰り着いて久々にポストを開けてみたら、いっぱいチャラシの間に「文芸思潮」アジア文化社からのお手紙が眠っているように入っていました。嬉しさに満たされた頭を転換して締め切り日を控えてこの「受賞の言葉」を慌てて書き始めたのです。

外国人枠の設けられていない賞に応募させていただいたのは初めてであり、受賞することは私にとってこの上なく嬉しいことです。私を魅了してくれた日本の風景と永遠に心に残る出会った隣人との触れ合いによる感動を、より多くの人々と共有したいという願いが応募させていただいたきっかけです。読んでいただく方々にとって共感を覚えていただければ幸いです。

この度の受賞に際し、これまでエッセイや詩作の指導をいただいていた方々に感謝とお礼を申し上げます。これからもこの賞を励みにより良い作品を書いていきたいと思えます。



李 湘

リ ショウ

本名 阮 瑞芳

1984 中国福建省生れ

2006 大連外国語学院大学卒業

同年紹興越秀外国語学院勤務

07 国際交流員赴任のため来日

09 鹿児島大学大学院博士前期課程人文研究科入学

現在に至る

光と闇の狭間

しおのやのぶこ
塩谷靖子

最近、面白い記事が新聞に連載された。そこには、一人の記者が、一週間アイマスクをしたままで生活した体験が書かれていた。「見えない世界を見てみたい」との思いから、このような体験をすることにしたそうだ。全盲である私としては、なかなかユニークな試みだと思い、楽しく拝読した。

その記者氏は、アイマスクをしたまま、白杖をついて街を歩いたり電車に乗ったり食事をしたり登山をしたりしたことだった。もちろん介助者と一緒なのである。

「一週間で何が分かるか」との指摘があるのではと、記者氏は心配されていたようだが、そんなことを気にする必要はないと思う。なぜなら、この体験記は、失明疑似体験ではなく、目の見える人が、アイマスクをつけた瞬間から、

足元でサクサクとささやく霜柱の音、枯葉のカサコソという乾いた音色、谷を渡る風が届けてくれる梅の香り、それらを、真つ暗な空間の中で体験したという。

私は、この連載を読んで、「完全に失明している人の日常は闇であると言えるのか」について述べてみたくなった。

全く目の見えない状態を「暗黒の世界」とか、「漆黒の闇」などと表現することがある。目の見える人だけでなく、失明者自身もこの表現をしばしば用いる。確かに、物理的には光が届いていないのだから、その状態を表すのには、便利で分かりやすい言葉だからだろう。だが、果たして、そのように言っているのだろうか。

私は、この言葉になんとなく抵抗を感じている。それには、「暗黒時代」、「闇に葬る」などの言葉が持つイメージも原因しているが、それよりも、この言葉が失明者の日常を正しく表現していないと思うからだ。実際、それぞれ表現方法は違っていても、「自分たちの日常は、目の見える人が想像しているような闇ではない」というのが、失明者の一般的な実感なのだ。おそらく目の見える人のほとんどが、闇であると想像していることだろう。そう思うのは無理からぬことかもしれない。なぜなら、突然真つ暗な空間に置かれたとき、突然アイマスクをしたとき、突然失明したとき、確かに目の前にあるのは闇なのだから。けれど、

それを外すまでの間、それまでほとんど気がついていなかった音やにおいや手触りをどのようにして感じ始めていたかを綴った、貴重で興味深い体験記としての価値があるからだ。

言うまでもなく、この記者氏の一週間の精神状態と、失明したばかりの人のそれとは、決定的な違いがある。前者には、未知の世界への好奇心があり、しかも数日後には元の世界に戻れるという保証がある。だが、後者にはそれがない。その意味でも、これは、失明疑似体験とは違うのだ。連載の冒頭に、アイマスクをつけた瞬間「失明の真つ暗な世界」に入ったと書かれている。そして、その「闇」は、一週間ずっと続いたようだ。最後の日に山に登ったときも、空にかざした手のひらに降り注ぐ太陽のぬくもり、

その闇は永久に続くものではない。しばらくその状態に置かれていくうちに、そこは「闇」ではなくなっていくのだ。物理的な意味では闇かもしれないけれど、感覚的には闇ではなくなっていくのだ。

光を見ているときに突然その光を遮断されれば、光と対極にある闇が見えることになる。だが、長い間光を見ていなければ、その対極にある闇もなくなっていく。やがて「明るくも暗くもない状態」に入っていくのだ。「明」があるからこそ「暗」があるのであって、常に「明」がない者にとっては「暗」もないのだ。つまり、失明者の日常は、明るくも暗くもない状態と言ってもいいだろう。その意味では、「失明」という言葉は、正しくは「失明暗」というべきかもしれない。

また、突然でなく、徐々に見えなくなった人の場合は、「闇」というプロセスをあまり意識することなく、いつの間にか、明るくも暗くもない状態に入っていくのだ。私も、幼いころに少しずつ見えなくなり、八歳くらいで完全に失明して以来、そんな状態が何十年も続いている。

「暗黒の世界」、「漆黒の闇」という表現に私が危惧を抱くことがもう一つある。それは、いずれ完全失明することを医師から宣告されている人たちのことだ。物を見ることができなくなるといふ事態に加えて、彼らの多くが、永久に続くことになるであろう「闇」への恐怖におびえているの

塩谷靖子

声楽家

しおのや のぶこ

鳥取県境港市出身。東京教育大学（現筑波大学）附属盲学校を経て、東京女子大学文理学部数理学科卒業。1971年、日本ユニバック（現日本ユニシス）株式会社に入り、視覚障害プログラマーの先駆けとなる。

42歳より、師について声楽の勉強を始める。その後、多くの音楽大学出身者に伍して各種のコンクールで受賞し、毎日新聞「ひと」欄をはじめ、新聞・テレビなど、多数のメディアに取り上げられる。東京文化会館での二度のリサイタルをはじめ、多数の演奏会に出演。レパートリーは、クラシックから愛唱歌まで幅広い。

第6～8回「奏楽堂日本歌曲コンクール」（審査委員長・畑中良輔）連続入選。第7回「太陽カンツォーネ・コンコロソ・クラシック部門」第1位。第4回「全日本ソリスト・コンテスト」入賞、他。『わかれ道～日本の四季に寄せるノスタルジア～』、『千の風』などのCDをリリース。

2009年より、エッセイストとしても活動している。エッセイ集『寄り道人生で拾ったもの』（小学館）が、「第58回日本エッセイスト・クラブ賞」の最終候補となる。エッセイ「深夜の散歩」が、『2010年版ベスト・エッセイ集』（文芸春秋社）に掲載される。

ホームページ <http://www.nobuko-soprano.jp/>



だ。私は彼らに言いたい。「そんなに怖がらなくても大丈夫。いずれ闇は薄らいでいくのだから」と。

「明るくも暗くもない状態」についての表現は、人によって様々だ。グレーの霧の中にいるようだと言う人、その時々想像した映像が白っぽいスクリーンに映っている状態と言う人、体調や精神状態によっていろいろで一日中間のベールがとれない日もあると言う人など。

また、いつ視力を失ったかによっても、その表現は違ってくる。見た記憶が全くない人の場合は、視覚以外の感覚を組み合わせることによって、視覚的な言葉では表現できない風景を作り上げているのだ。

大人になってから失明した人のスクリーンに映る風景に比べれば、私のそれは曖昧で、夢の中に現れる蜃気楼程度のものであろう。それでも、暖かい日差しを受けて晴れやかなヒヨドリの声を聴けば、私のスクリーンには例え臙脱であらうと青空が映る。風が冷たくて小鳥の声も少なければ白っぽい空が、雨が降っていれば灰色の空が映る。ときには、雨や日差しに気づかずについて、実際とは違った空が映っていることもあるが、所詮は蜃気楼のようなものだから、いつの間にか修正されていることが多い。

もしも、失明者の日常が漆黒の闇に覆われていたとしたら、黒いキャンバスに絵を描くのが難しいのと同じように、

闇のスクリーンに風景を映し出すのは困難なことだろう。そして、その闇から常に逃れられない状態にあるとしたら、きっと圧迫感に耐え切れなくなることだろう。そうならぬのは、生きていくための自然の摂理によるのかもしれない。

「想像ではなく本物の、光と色に溢れる世界をもう一度見たい」とは、失明者の偽らざる気持だが、それと同時に、「本物の闇が恋しい」と思うこともあるのだ。もし、常に闇の中にいるとしたら、そんなふうには思わないはずだ。失明者が闇を恋しがるというと奇異に思われるかもしれないが、明るくも暗くもない状態にある「失明暗者」とっては、本物の光と同時に、ふと本物の闇が恋しくなることもあるのだ。もはや体験することのできない、突然目隠しをしたときの闇、真夜中の森を覆い尽くす闇、夜の路地裏のあちこちに潜む闇、カーテンを閉めて明かりを消した寝室に漂う闇が……。

受賞の言葉

塩谷靖子

「六十の手習い」と言いますが、今、私はまさにそれを実践しているところなんです。あるきっかけで、二〇〇九年に拙著『寄り道人生で拾ったもの』を小学館から出版していただいて以来、六十も半ばになって、急に書くことに目覚めてしまったのです。これまでにも、仲間内の会報などに駄文を書くことは時々ありましたが、大勢の方々に読んでいただく文章を書くとなると、会報のように気楽に書くわけにはいきません。何度も推敲し、それでも自信が持てなくて、お払箱行きになった原稿は数知れず、でも、そんなふうにして、六十の手習いは少しずつ軌道に乗ってきたように思います。

この作品は、テーマが特種なので、理解していただくのが難しいかもしれないという懸念がありました。また、逆に、特種だからこそ「面白い」と感じていただけるかもしれないという期待もありました。そして、その期待通りに感じていただけたことを、心から感謝いたします。

また、私たち視覚障害者が、点字でなく一般の文字で、このように自力で文章を書けるのも、パソコンの画面読み上げソフトのお蔭です。長年にわたって、各種ソフトの開発に尽力してこられた方々にも感謝を捧げます。

立秋の風立つ日に

生かされた命の役目

上村和子

生かされたに違いない私の命は、今年で十五歳を迎える。一九九五年一月十七日朝、神戸を崩壊させた未曾有の大激震。身動き取れない瓦礫の下で私も夫も命を拾った。隣室の天井は布団に包まっていた私達の鼻先に有り、横たわった身体の周りにはありとあらゆる物体が飛び回って着地した様に埋め尽くされている。まるで土中の棺に納められたミイラの如くだ。余震の度にミシミシ、ギュツギュツと崩れる音に震えながらも、冷静に頭は回っていた。

この状況で無傷でいる私は本当に生き延びたのだろうか？ いや、これは生かされたのだ。誰かが私を生かしているのではないか。もし、ここから出ることができたら、いつの日かきつと「ああ、これが生かされた意味だったのか」と気付くのだろうか。とぼんやりと考えていた。

そして、太陽が真上に上った頃、暗闇から救出され眩しい光に包まれた時、それを確信した。誰かが、眼に見えないも判断できなくなる。その母には満州からの引き揚げ時に出産し残してきた次男がいたのだ、私の二つ上の兄である。父は「死産した中国人に実子として渡してきたので決して捜してはならぬ」と言い張って来た。母は女、男親とは違う、忘れようなどないのだ。母の痴呆が進めば進むほど一目会わせてやりたいと胸が痛んだ。それ以上に、日本の親を探していたとしたら、生きているうちに母の温もりを伝えてやらねばと思った。忘れたわけではないと言いつても捜し出さねば意味がない。いたたまれなくなり、兄姉に相談した。兄姉とて思いは同じ、協力は惜しまないので頑な父にわからぬよう、家を出ているお前が動けと言うことになった。

厚生省との窓口を私が一手に引き受け、慎重に調査が始まった。互いに求め合っていた今がその時だったのだろう、噛み合わない互いの資料だったが、あつという間に私との対面調査、DNA鑑定（母の毛髪と爪を持参）と進み、親子・兄妹関係が確立され、奇跡の身元判明者となった。

反対していた父には長兄がこれらの事実を話し、「母に会わせてやってほしい」と言った。どうなることかと思っただが、頑な父も次兄が無事に生きていたことを喜び、養父母の許しを受け日本永住を叶えたと知って、仏壇に手を合わせた。

暫くして、次兄は妻と共に家族に会いに来た。誰かも判

い何かがほほ笑んで包み込んでくれた気がした。寒さに震えながら待っていてくれた家族の無事に、安堵し、この私が必要とされる出会いの時を楽しみにしていようと思った。しかし、それはほんの一瞬のことで、その後頭をよぎることもなかった。想像を超える悲惨な町の状況が明日を思う余裕すらなくしていたのだ。子供達も親達も全てが家を失い、厳しい避難所生活を経て、援助も乏しく自力で再建してゆく年月の中、「生かされた命」などと悠長なことを思うこともなく過ごしていた。

地震の一ヶ月後生まれた孫娘の成長が我々の暦になって年月が流れてゆく。住処をなくした三世代が実家の更地にサティアンのような箱家を建て、四つ並んだ表札に明日への希望を託した。厳しいながらも落ち着いた日々が何年か過ぎた頃、いよいよ実家の母の痴呆が進みだし、時折我が子別できない母なのに、母は「お母さん、遅くなりました」と手を握る次兄をじっと見つめると、溢れ出る涙を拭いてもせず肩を震わせながら兄を引き寄せた。皆驚き「誰かわかるの？」と聞くが、首を傾げるだけで、ただただ手をさすり肩をさすり満面の笑みに涙を浮かべ次兄を見つめた。痴呆で脳の破壊が進んでも、生み落としてすぐ手放した子と思う心は生き続けた。

その後の戸籍問題などは長兄に任せ、私の役目は終わった。御役所仕事は「前例がないから」と一向に進まず、二年をかけてやっと実家の戸籍に出生届を出し、間に合わせた日本名でない本当の名前を持った。

そして半年後、兄姉揃って母を見送った。長兄が位牌を持ち、次兄に母の遺影を持たせて見送った時、ふと脳裏を横切る思いがあった。

「ああ、これが、生かされた命の役目だったのか」と。まさか、もっと重い役目が待っているよとは思いもせずに。

震災を臨月真近の長女のお腹で持ち堪えた孫娘は、震災の復興とともに順調に育って中学生になった。

六年生まで、手抜きもせず学業にクラブに御稽古事に一生懸命走り続けてきた姿は、けなげなほどだった。必死というのでもなく、嬉々として励んでいた。順風満帆過ぎて、それがむしろ怖いくらいだった。

あれをしろ、これをしろと周りがハッパをかけることもないのに、あれもこれもと手を出し、全て結果を残してしまふ。その結果を親もじいちゃんもばあちゃんも喜ぶ。孫娘自身もさらに喜んでもらいたいと頑張る。さらにまた成績が上がる。駆け昇るこの上ない成績に私はむしろ茶々を入れたものだ。

「こんな成績おもしろくないやん、後は落ちるしかないんだよ」

それでも孫娘は言い切るのだ。

「なんで？ 落ちなきゃええやん」

このプライドが災いにならなければいいが……。哀しいくらいに私の来た道を歩いている。その危惧が当たってしまった。

中学一年の夏休み明け、孫娘の悲鳴に近い声に驚いて、私は二階に駆け上った。

「学校に行きたいのに行けない！ 怖い！」と孫娘は制服のまま寝ころび、拗ねた赤ん坊のように足をばたつかせていた。その姿に私は一瞬凍りついた。手が付けられない。

「行けないなら連絡を入れなさいと。無断欠席になるので。——とにかく落ち着くのを待っている」と母親は強張った表情でその姿を見つめている。

来るべきものが来てしまった。彼女も、我が子の挫折の時と覚悟したに違いない。その顔を見て、私も腹を括った。

注文を付ける。休みが続くと「休み癖がつく」と、あの手のこの手で登校させようとする。

しかし、何もかも自信をなくした孫娘にはそれさえ苦痛になり、やがて通学路の信号機の音にも、沿道の車の音にも怯え、家の中でも音を嫌がり、母親と私以外から声をかけられることすら拒絶。お風呂も、トイレもドアを開け、どちらかの気配がなくては使えなくなった。玄関を出るところはもちろん、人混み、電車、バス、車すら乗れなくなった。頑張ろうとしては途中で過呼吸になり、真っ青になる。心療内科にも一度這って行かせて、それきり。再び受診できらるまで二年半かかった。

父親の単身赴任で母子家庭だが、仕事を辞められない母親の留守中、ずっと、目の届く所で存在をわからせ不安を取り除いてやる役目が、この私だった。

心の病に、教科書的答えはない。まだ若い母親には、理屈では解決できないものだ、と、理解できないのだろう。戸惑っているのがあるありと見てとれる。今はただ、抱き止めてやればよい。一からの子育てと思つて胸に包み込めばよいのに、泣き止むまでしっかりと抱きしめているだけでいいのに、それができないでいる。私は、この時になつて初めて、大きな後悔に苛まれた。遠い昔の子育てに、取り返しのつかない見落としをしていたと気付いたのだ。

私は、自分の娘を十分甘えさせてやれなかった。愛情に

夏休みが過ぎて二学期を迎える時の憂鬱で済めばよいが……と、様子を見ていたが、明らかに孫娘は心を崩していた。

全てが順調に結果を残してきても、必ず挫折が訪れる。その時立ちあがれる力をこの子は持っているのか、疑問だった。これは似た者同士という勘でしかないが、できるだけ早くその時が来てくれればと願っていた。

情緒障害の闇にさ迷つてしまふ時、もう自分を変えるしかないのだが、思春期真っ只中ではそれが難しい。

孫娘は支離滅裂になり、頭を掻きながら「私じゃない！ こんな頭要らない！ 捨ててしまいたい」と訴えに来る。自信に満ちプライドまで確立していた人間がコントロールを失った時の怖さは私にはわかるのだ。私も通つて来た道だから——。

頭が混乱して泣き叫び足をばたつかせる姿に、私は思わず、

「大丈夫だから、アンタはちゃんとここに居るから」と抱きしめる。

それで落ち着くのだが、母親である長女は茫然と座り込んでしまふ。

「どうして、お母さんにこの子の気持ちがわかって、私にはわからないの」と涙を拭う。

学校側も不登校枠に入れて、何とか登校させようと色々差を付けたつもりはなかったが、ゆっくりと抱きしめ、甘えさせてやった記憶がない。ゆっくりと膝に乗せてやった記憶がない。長男は一歳の誕生日を境に喘息を発症、日夜かかりつきりになった。二つ違いで生まれた長女は手のかからぬ良い子で私を助けてくれた。いつも空気を読み、私の手を煩わすことはなかった。思春期になつても、問題を起こすこともなく、成人してすんなり結婚生活をスタートした。手のかからぬ良い子であったことをよいことに、私は母親として長女をたっぷり甘えさせてやれなかったのだ。今、我が子にそれをやってやれと言つても無理なことだと申し訳なく思った。

ある時長女は呟いた。

「私はどんな時も自分で頑張つて乗り越えてきた。この子にできないわけがない」

その時初めて、何も問題がなかったわけではなく全部自分で頑張つて来たのかと、思い知つたのである。

「お母さん、私が中学の時一学期間、部活に出られなかったこと知らないでしょ」と言われて、振り返つたが、思い起こせないのだ。見逃していた。店と家の往復で忙しかつたにせよ、それは言い訳でしかない。そんな私の傍らで、長女はいつものように良い子でいるしかなかったのだろう。切なくて、むしろこの長女を抱きしめてやりたいと思つた。

孫娘も人の話を聞く余裕もでき、私なりの挫折克服の技

も伝授した。人にも自分にも完璧を望むから苦しい、許せないから辛い、肩の力を抜いてもう少し適当に生きることが覚えよう、楽しんで生きよう。挫折は敗北ではない、財産だと思つて胸を張つて歩むことだ。

この春、学校にも出向き、卒業証書を自らの手で貰った。少しずつ外出も、家族や友人との団欒もできるようになった。好きなことに夢中にもなり、普通に思考決断もできるようになった。人間の弱さも知つたはずである。これから新しい自分探しの旅が始まる。

私は孫娘のだけよりもの理解者ではあるが、親鳥ではない、必ず親鳥の元へ、娘の元へ戻してやらねばと踏ん張ってきた。せめてもの罪滅ぼしである。

いつの間にか、母の背丈を越え姉妹のように寄り添つて散歩に出る二人の姿を眺めホツとしている。願わくばこれ私の生かされた命の役目を終えたい。



上村和子

うえむら かずこ
1947 神戸生まれ
本名・高垣和子
2007 「花冷えの朝」で第5
3回「文芸思潮」エッセイ
優秀賞受賞
08 「命を生きて、今」
で第4回「文芸思潮」エッ
セイ奨励賞受賞
目につくもの耳にするも
のすべてに興味を持ち続け
たい。

受賞の言葉

上村和子

この上ない大きな賞をいただきとてもうれしく、ありがたく思っております。

学生時代から興味を持っていたシナリオの応募も、いつも八合目止まりの結果に終わり、諦めかけていた時、母の死でレクイエムのつもりで初めてエッセイらしきものを書いたのが第三回の優秀賞をいただいた「花冷えの朝」でした。阪神淡路大震災の被災者として書かせていただいた「命を生きて、今……」も第四回の奨励賞をいただきました。エッセイらしきものの域を越えられず、どう書けばエッセイになるのか解決できないままでしたので、案の定第五回は三次通過止まりでした。でも、不思議なもので、応募し続けると、書きたい材料より先に、試したい気持ちも止まらなくなるようです。長く苦しかった年月の終わりが見え始めた時、これで終わりにしたいと願う気持ちも、締切間近の第六回エッセイ賞を思い出させてくれました。そして推敲する過程で、解決できなかったモヤモヤは吹っ飛びました。受賞に加えてこれからの希望までいただきました。今回は、内容が内容なので、これを書いてもよいのだろうかとかためらいつつ、長女や孫娘に無断で書き終えました。さあ、これから彼女たちはどう伝えようかと、贅沢な悩みに揺れています。明日にでも「ありがと」「ごめんね」と頭を下げねばなりませんね。

酸漿

第6回
文芸思潮
エッセイ賞
特別賞

近所のスーパーマーケットの店先に酸漿の鉢植えが並んでいた。昔は故郷の村のあちこちに生えていたが、最近あまり見かけない。懐かしく思い、良さそうなのを一鉢買って来た。住居がマンションの六階なので、鉢のままバルコニーに置いた。花はまだ付いていないが、葉がよく繁っている。

子どもの時分には、道端や畑や土手や庭などどこにでもあつたし、屋敷の隅のゴミ捨て場などは肥しの効いた立派なのがずんずんと生えていたので、酸漿など雑草に見做して、遠慮なく実をもいで遊んだ。赤い実をくにやくにやになるまでよく揉み、帯をうまく剥がしてそこから中身をきれいに吸い出すと、ちっちゃい風船ができる。それを舌の上に乗せて口蓋でそっと押えると、ギユウと鳴る。ギユウと鳴らしたものだ。そんなことを考えながら、バルコニーの酸漿の前にしゃがんで、初夏の朝風に吹かれ

武藤蓑子

ていると、遠い日の生家の裏の桑畑に生えていた青い酸漿の木が見えてきた。

私が生まれ育ったのは、八ヶ岳の麓の村である。すべて農家だった。とりわけ夏は、田圃や畑仕事の他に養蚕をしたので、桑摘みに忙しかった。大人の頭よりも高い鬱蒼とした桑畑に分け入り、早朝から露に濡れながら桑摘みをした。子どもは三貫目籠が割り当てられた。それをぎゅうぎゅう詰めにしなくてはならないのだが、いくら摘んでもいっぱいにならない。ほとほと嫌になり、うんざりとしやがみ込んで土いじりなんかしていると、「遊んでねえで、精を出して摘めよう」と、あつちのほうから大人の声が飛んでくるのだった。そんなふうにはしゃがんでみると、その視野に、白い小花を付けた酸漿の木がよくあつた。怠けの手もち無沙汰に、その葉を窺って青臭い匂いを嗅いでみたりし

た。頭上を覆う桑の青闇の中で、それは葉陰に秘事を隠しているような青さに沈み、何か孤独な佇まいだった。

この光景から、私の頭に「間引く」という言葉が流れる。それは昔の貧百姓の陰の部分のことだ。貧困ゆえに子を養えない人々は、子どもの数を限らなくてはならない。しかし、避妊の知識や方法がないため、妊娠を防ぐことができずに、やむなく嬰兒を死なせたり胎児を墮したりした。それを「間引き」と言うのだが、いわば「児殺し」のことである。その一つの方法として、酸漿の根を挿入して墮胎したそうだ。

あの木綿糸のような根が、身体の底を突き刺し引つ掻きまわすのだ。破壊された胎児はだらだらと流れ出る。母親の膣や分娩道は傷だらけになり、傷んだ粘膜にひりひりと酸漿の毒が沁みる。さらに、根に付着していた土から破傷風菌などの細菌が感染して、母親が敗血症の痙攣に身体をのけ反らせて死ぬこともあったそうだ。胎児を破壊した酸漿の根が、母親の命をも死に導くのだ。

私が考えるに、ひよつとしたら、その墮胎は桑畑で行われたのではないだろうか。なにしろ、大抵の桑畑に酸漿があったのだから。それにそう考えるのには、かねて聞き知ったもう一つの「間引き」のこともあるからだ。

ついに墮胎できず臨月までできてしまった場合、野良仕事の間などで陣痛がくると、桑畑へ急ぎ、あらかじめ掘つ

それは母の埋葬の時からさかのぼる。

故郷の村が土葬だったのは、いつ頃までだったろうか。大抵の家が、畑の隅のわずかな敷地を墓地にしていた。深い穴を掘って、四角い座棺を埋めた。埋めるとこんもりと土饅頭ができた。その上に大きめの石を目印に置き、まわりに卒塔婆や花や線香を突き刺し、米や団子などをのせた。時を置かず死人が出ると、そこをまた掘らねばならない。そうすると、この前の埋めた棺や埋葬物が出てきて、時には、朽ちかけた棺の板が外れてまだ腐りきらずに座っていた死人がよたりと倒れ出たりもした。そんな埋葬の様子をよく覚えている。

母が死んだ時は、それまで長いこと亡くなった人がいなかったたので、土饅頭は凹んでしまい、その凹みに目印の石が苔むして沈んでいた。母は火葬だったけれど、そこを昔ながらに村人たちが穴を掘り、土葬と同じ形式で遺骨を埋葬した。母の骨壺が深い穴に下ろされたとき、「そっちの石もいっしょに埋めてやれ」と言う声があった。そう言った人の目の先には、一つの小ぶりの石が転がっていた。誰かの手がその石を拾い、穴へ落とした。それはポトッと骨壺の横へ落ちた。

母の壺と小さな石に、土が掛けられていくのを、私は覗き込んで見ていた。すると、「あれは、おめえの妹だ。生まれてすぐ死んだ三人目の女の子だ」と小さく告げた人が

ておいた穴へ産み落とされたのだそうだ。その穴は嬰兒の墓となるのだが、その日は土をかけずにそのまま置き、母親は去る。けれど、痛んだ腹よりその心の痛みはいかばかりか。心は桑畑に残り、その穴を思い詰めたことだろう。泣き声がする気がして、何度も耳を敵てたに違いない。そして、嘆きを忍んだ母親は、次の日、死の穴の児に土をかける行く。時に、思いがけずも空耳でなくまさに泣き声を聞くことがあった。母親は持ってきた鍬を放り出して走り寄り。なんと、穴の底で土や血に塗れた児が、自らの臍の緒や桑の根を引つ掴んで泣いているのだ。母親は穴に飛び込み拾いあげる。野生動物などに喰われもせず、よくぞこの過酷な穴で生きていた。この生命力の強い児は、どんな逆境でも育つはずだ。然るにその児を「桑っ子」と呼んだそうだ。

私は、桑畑の穴に落とされたものを思い浮かべる。胎児の血塊や、胎盤に繋がれたままほやほやと蠢く嬰兒。穴の上は桑の青い闇。青闇の下に白い花をつけた酸漿の木。それを引き抜く農婦の手が見える。

貧困のもたらす秘事は、私の母の身にもあった。その記憶は私の頭の底に、浮遊する萍のように静かに動いている。思い出せば、あの日の光景が幻燈写真のように頭の遠くから映し出されてくる。

いた。

「あの小さな石は、三人目の女の子」

しだいに土が盛り上げられ、土饅頭ができて、昔からの目印の石がまたのせられた。

私はあの小さな石があった辺りを振り返って見た。そう言えばそこに思い出す姿があった。母が畑の帰りに、その石に線香をのせていた姿だ。しかし、私はそのことを気にしたことはなかった。墓から少し離れた所にあつた、ただの石に見えてもいたので、私は踏ん付たりしていただけである。

そしてさらに思い出す光景があった。あの日だ、あの日生まれた児だ、と思い当たった。

五歳位だったろうか。三歳下の妹と母の前に並んで、身体を整えてもらっていた。母は大きな腹をしていた。母は腹を押さえ、しきりに顔を嚙めていた。そして私たちをきちんとさせると、庭で遊ぶようにと言って、自分は腹を押さえて前屈みに裏側の小部屋に入って行った。それからすぐに、腰の直角に曲がった小さな婆さんが、父に連れられてやって来た。その人は念仏婆と呼ばれている人で、村の人の何やかやにつけて念仏を唱えて、お金を貰っている人だ。皺くちゃで胡桃の殻みたいな顔の婆さんは、齒のないう口をむにゅむにゅ動かしながら、裏口から母のいる小部屋に四つん這い上がった。庭にいた私は遊ぶどころでは

武藤蓼子

むとうみのこ

- 長野県茅野市出身
- 二十代より短歌を始める
- 1977 角川短歌賞候補
- 40代になって随筆、詩、小説などを書き始める
- 2003 「長野日報社」長野文学賞随筆入選
- 06 「長野日報社」長野文学賞受賞
- 08 第4回「文芸思潮」エッセイ賞優秀賞受賞
- 09 第5回「文芸思潮」エッセイ賞当選
- 10 島崎藤村文学賞佳作



あの日生まれた女の児。母の墓に投げ入れられた小さな石は、その女の児だ。しかし、私はあの児の産声を聞かなかった。あの児はすぐに藁に包まれて桑畑へ行った。やはり酸漿の根で突かれたのだろうか。それとも、分娩の瞬間に母親が股を閉じて、出かかった児を窒息死させるといふ「間引き」もあつたそうだが、それだろうか。とにかくあ

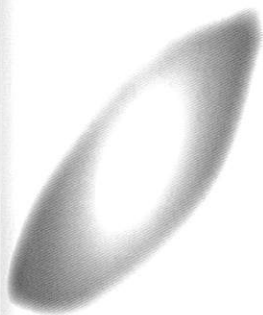
ように鼻先で片手を振った。

それから少しして、婆さんが小部屋から出て来た時、祖母がお金を渡しながら、「どっちだったえ」と聞いた。婆さんは胸元から引つ張り出した巾着にお金を入れながら、皺くちやな口元をちゅばつと開けて、蛙のような声で「女」と答えた。そして曲がった腰を起して胸元に巾着を押し込んだ。祖母は「また女か」と言つて鼻を擧め、何かを払うように鼻先で片手を振った。

の日は産婆ではなく、念仏婆が来たのだった。母が死んだのはそれから三十年も後だった。母の死因は敗血症だった。敗血症になった原因は医師にも分からなかった。あるうことか私の頭には酸漿の木が浮かんだ。何かあの日と符合する気がした。

バルコニーはまぶしく、酸漿は風にそよいでいる。回想にふけていて足が痺れてしまった。実は私はこの回想にたびたび陥る。なぜこんなに酸漿と桑畑を思い出すのだろうか。まさか、私は桑畑の穴にいた桑つ子だったということはあるまい。最初に目にしたのは桑畑と酸漿の木だった、その原風景に帰るからだ、と考えるのも馬鹿げているだろう。

ともあれ、目の前のこの酸漿は、初夏の陽を明るく受けている。これが赤い実を成らせるのが楽しみだ。指で葉をつついたら光った。



受賞の言葉

武藤蓼子

猛暑が続く、少々夏ばて気味の夜、うれしい報せを頂きました。

私は、書きたいことがあるのですが、いざ書く段になると、いつも、まるで泥の中を掻き回しているような混沌とした感じになってしまいます。文字や言葉が出たがり引つ込んだりするばかりで、いつこうにまとまらず、いつも頭を抱え呻吟しています。そんなことで、やっと書き上げたときには、もう自分ではそれがどのようなものかわからなくなっています。

その点では、文芸思潮に応募することは、作品を自分から離し、客観的に評価できる優れた機会です。しかも高い位置から評価を得られ、恐い気もしますが、非常に鍛錬になります。そうした状態で仕上げたこの作品が、このたび受賞の榮に浴することができましたことを、うれしく思っております。また努力いたします。ありがとうございます。

オアシスのリハビリ

ろくあいこうよう
六藍光洋

今から一〇年ほど前のこと、JICA（国際協力機構）は、チュニジア政府から、オアシスのリハビリ調査をして欲しいという要請を受けて、調査団を派遣したことがある。そのメンバーに、私も調整員として招聘された。

チュニジアは、地中海を挟んで、イタリアの対面にある国。もともとは回教国であったが、フランスから独立後、共和制を敷き、民主化を進めた結果、今ではヨーロッパに準ずる近代国家になっている。産業は、農業、リン鉱石の採掘、外国の下請け工業、観光などが主たるもの。人口は、北の地中海沿岸に集中しており、南には広大なサハラ砂漠が広がっている。

オアシス救済のSOSが発せられたのは、最近、地下か

そこには、市場、商店、銀行が存在し、その地域の物流センターをなす。隊商が命がけて過酷な旅をしてやって来るのは、何も渴いた喉を潤すためではなく、たんまり儲けて懐を潤すためなのである。

一方、オアシスは、農業でも大きな役割を担っている。オアシスで農業なんて、と思われる方のために、どんな農業が営まれているか、簡単に述べておこう。

チュニジアのオアシス農業は、階層式農業と呼ばれる。それは、同じ空間を利用して異なる作物を同時に作るやり方で、水の乏しい砂漠では、実に合理的な農法である。普通、オアシスの空間は三層に分けて使われる。

最上階の第三層は、ナツメヤシが占める。この木は高さが一五、六メートルほどに達し、幹には枝がなく、頂に三メートルほどの羽状の葉を茂らせる。葉の付け根から出た房に無数の実が付く。そのサイズは親指大で楕円形をしている。熟して銚色になったものは、干し柿のように甘い。一般にはデーツの名で知られる。デーツは栄養価が高いので、食料が乏しい砂漠では貴重な食物である。デーツは、日本へやって来ると、ウスターソースの原料となる。あの、どろりとした食感と甘味は、この実が出している。

上空を蓋ったナツメヤシの葉は、ドーム状の屋根になって、太陽の強い熱を遮るので、その下では、普通の作物を作るのに適した環境が生まれる。

ら湧き出す水の量が減って、それに依存しているオアシスが崩壊の危機にさらされるようになったからである。

オアシスというのは、乾いた砂の海に、忽然と浮び出る緑の島で、滾々と水が湧き、ヤシの木が生い茂る。乾いた砂漠を旅して来た者は、思いきり喉を潤し、木陰でまどろむことができる憩いの楽園……というのが、私の抱いていたオアシスのイメージであった。

だから、外務省が、この調査の方針を話し合うために関係者を招集するまで、「オアシスのリハビリ」と言うのは、何をするか皆目分らなかった。

その会議で、オアシスは、砂漠の民が営む経済活動の中心地であることを、私は知った。

オアシスには、ときに、人口が数万にも達する街がある。

中間の第二層に植えられるのは、果樹である。柑橘類、ザクロ、アンズ、ナシ、ブドウ、など。

最低階の第一層では、トマト、ナス、キュウリ、ピーマン、サラダ菜、ジャガイモ、ニンジン、各種マメ類、等などの野菜が栽培される。ときには牧草も。

これがオアシスの農業である。それは、そこに住む住民にとって、自給の手段であるばかりでなく、余剰生産物を外部へ売って得る貴重な収入源でもある。

近年の水不足で、今、オアシスは崩壊しかけている。オアシスが崩壊してしまえば、その住民たちは農業ができなくなり、自給ができなくなる。そればかりか、収入源も断たれてしまう。さらに悪くすれば、そこに住んでいることさえできなくなる。誇張ではなく、彼らは、今、太平洋諸島の住民たちと同じ存亡の危機に瀕しているのだ。国が動かなければならない理由が、ここにある。

この問題の元はただ一つ、水である。近年、気候変動で地域の降雨量が減って、地下水が涵養されなくなってしまう。そのため、オアシスに昔から湧き出していた水の量が激減している。オアシス農業は灌漑農業だから、灌漑の水がなければ、もはや農業として成り立たない。

水を確保するにはどうすればよいか？ それが、我々の調査に付き突けられた課題であった。

チュニジアに入った我々は、先ず現場を見て回ることにした。調査の対象とされたオアシスは、特に傷みのひどい五つだった。

首都のチュニリスを出て南下するにつれて、ナツメヤシの被害が目立っていった。この木は大量に水を消費するので、水源から遠いところにあるものは、灌漑の水が十分行き届かず、枯れ始めていた。そしてもちろんそれは、二層、一層の作物にも影響を与えていた。

我々は、対策として、予め二つの案を用意していた。

第一案は、ボーリングをして、さらに深い水脈から水をくみ上げるというもの。深さは、二、三〇〇メートルに達するだろう。もし十分な水が得られなければ、得られるまでボーリングの数を増やして行く。

第二案は、今の灌漑方法を見直して、使う水の節約を図るといふもの。

決め手はコストである。第一案は、比較的容易にコスト計算ができるが、第二案は現場で実験をして、現実の水のロスを調べ、それを何で補うかを考えて、コストを弾き出すことになる。

最後のオアシスへ行く途中で、思い出深い場所を通った。

—その通り。

彼は無感動のまま答えた。

見た限りでは、周りの砂漠と全く区別がつかない。

—あの、満々と溢えられてた水は、どこへ行っちゃったんだい？

—空へさ。

—ええっ！ それは、いつのこと？

—もう一〇年も前になるかなあ。

そのとき、私は地平線をゆっくりと進む船の影に気付いた。一瞬、私は、運転手が嘘をついたのではないかと疑った。あそこへ行けば、まだ水があるんじゃないか？

ところが、よく見ると、その船は砂から浮き上がって走っていた。私が見たのは、砂漠ではよく見かける、蜃気楼だったのである。

我々は、砂漠の中をさらに進んだ。

車は砂漠に小高く突きだした、岩山の名残を留めたテラスの上に来て止まった。

そこからだと、周囲が眼下に一望できる。

紺碧の空。地平線まで続く真っ赤な砂丘。目の下に広がるナツメヤシの濃い緑の絨毯。広さは、甲子園球場の二〇個分位はあるだろうか。その中には、家々の屋根も仄かに見えた。そこが我々の目指していた最後のオアシスだった。

それより二〇年ほど前、私は日本の漁業調査団に随行して、すでにチュニジアを訪れていた。

砂漠の中に海とつながる大きな湖があって、ここでは、チュニジア伝統の追い込み漁が行なわれていた。最後の團いに追い込んだ鯛を網ですくう、勇壮なものであった。フオークロリックな魅力があったが、それを見た大洋漁業の課長は、これではとても商業ベースに乗らない、と一笑に伏した。しかし、そのとき見た素晴らしい光景はずっと私の脳裏に焼き付いていて、もう一度それが見られるのを、とても楽しみにしていた。

二〇年前に、その漁場へ行くために、チュニリスからやって来た我々は、湖の中に何キロか真っ直ぐに伸びる道路を走った。それまで眩しい砂のレンガ色で痛めつけられていた目は、紺碧の空を映した湖の青さに優しく慰められたのを覚えていた。

ところが、今回は、そこへやって来ているのに、私はまだ、自分がどこにいるのかわからなかった。

地表より一段と高くなって一直線に続く道を三分の一ほど来たとき、ようやく、周りの景色に見覚えがあるのに気が付いた。

—これは、かつて水の中を走っていた道路ではないのか？

私は運転手に問うた。

何と、雄大で、素晴らしい眺めであることか！

が、しかし、それはまた、ドキリとする眺めでもあった。と言うのは、その美しいはずの緑の絨毯が三分の一ほど、真っ白に剥けてしまっていたからである。その部分では、すっかり葉をおとしたナツメヤシが、幹だけを白骨のように空に向って突き出していた。その光景は、私が何度目目にしてきた、砂漠に行き倒れて累々と屍を晒す、ラクダの群を髣髴とさせた。

そして、それこそが、我々が調査をしに来た現実そのものであることを知って、私は慄然とした。

我々の調査では、インフラの整備と給水管理とで三分の一ほどの水を節約できるという結論が出た。第一案に比べるとこの案の方がより少ないコストで実施できるので、それを採用するよう先方へ提言した。ただし、それには、もうこれ以上、地下からの出水量が減らないという保留条件が付けられていた。そうすれば、向こう一〇年間は、今の規模の農業が続けられるだろう。

たった一〇年間だって！ 私は、自分たちの出した結論の脆弱さに戦った。では、それから先、オアシスはどうなるのだ？ Insh'Allah (イースラム教の祈りの言葉、アッラーの思召すままに！) なのである。そこから先は、我々の力も及ばない……。

ところで、ここまでずっと我慢して来たことを、最後に言わせて頂きたい。
それは、この調査の間に我々が体験した、神の啓示とも思しき、自然の発するメッセージ——干上がった湖と枯れかけたオアシス、についてである。

私が言いたいのは、こういうことだ。

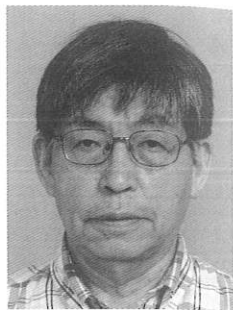
あの湖が干上がった後には、また別の湖が干上がるだろう。あのオアシスが枯れてしまえば、また次のオアシスが枯れ始めるだろう。すると、これは、単にその干上がった湖や枯れたオアシスだけでは留まらない。さらに、これと同じことが、今、地球上の至る所で起こっているとしたら……。

この現実を突きつけられて、我々のとるべき道は？

唯一つ、その根源に何があるかをとことん問い詰めることである。

それには、持てる知力と想像力とを総動員して当る。そうすれば、答は誰にでもはつきりと見えて来る。

その答は、**人類の未来に対して我々は何を選択するか**、であるはずだ。もし、誰もが、本気で明るい未来を望んでいるのならば。



六藍光洋

ろくあい こうよう

兵庫県生まれ
大阪大学文学部卒業
渡仏 (1971—1980)
フリーランス通訳
ODA (政府開発援助) 通訳として西アフリカで業務に従事
2009 「砂漠」で第5回「文芸思潮」エッセイ賞奨励賞受賞
現在、無職

受賞の言葉

六藍光洋

私は、自分にできそうもないものばかりに手を出すと書いて、家内からしょっちゅう叱られます。

その最たるものがフランス語でした。もともと外国語は大の苦手なくせに、大学では一番難しいと言われるフランス語に登録してしまいました。魔が差したとしか言えませんが。お陰で、その後、塗炭の苦しみを舐めることになりました。やっとフランス語を卒業できたのは、人生の半分以上が終わってしまっただけのことでした。

すると、今度は、ずっと封印していた書くことに手を出してしまいました。これもまた、魔が差したのです。報いはすぐにやって来ました。自分の書いたものを読み返す度に、まるで二日酔いに遭ったように胸がむかつき、自己嫌



オアシスで枯れたナツメヤシ 著者撮影



悪の激しい波に襲われます。下手糞、舌足らず、実の入らないしいな糊のような文章……、ありとあらゆる罵詈雑言に弄されながら。第一、物を書くなんてことがおこがましいんだよな。それなのに、ああ、それなのに、失敗しても懲りずにまた書いてしまうのはなぜ？ それは、ときおり体の芯から湧き上ってくる、言うに言えない言葉への深い愛着のせいなのだと思えます。

この度は、並みいる応募者の方々の優秀な作品を差し置いて、私の拙文がこの賞に推挙されましたことは、望むべくもない幸せでした。お選び下さった審査員の諸先生方に、心よりお礼を申し上げます。

愛国主義と人種差別

ユンジュヒョン
尹柱鉉

去年の九月初め(二〇〇九年九月五日)、韓国を卑下する発言があったとしてメディアに集中報道された人気アイドルグループ2PMのリーダー、パク・ジェボム(22)氏が八日、グループから脱退して韓国を去った。

問題の発火点となったのは、約四年前、パク氏が米国のソーシャルネットワークワーキングサイトである「マイスペース」に残した言葉のためである。彼は「韓国がきらいだ」、「韓国人はおかしい」などと書いたが、ちょうど、その頃は在米同胞として、韓国に来て練習生活動を始めた頃であった。今回の事件は「第2のユ・スンジュン事件」とも名づけられ、韓国社会に依然としてありつづける強い愛国主義、民族主義コンプレックスを現した良い例であった。「韓国が嫌いならば去れ」といった強固な愛国主義は、公認も有

名人でもない、ただの練習生時代の若者の発言まで、思想検証するものにつながった。

なぜ、今の21世紀社会において我々大韓民国は、特に韓国人の血を引いているということだけで強い愛国心を要求するのであるのか？

故郷より大切なのが血筋である。しかし、それ以上に重要なのが、現在その人が持っている考え方であろう。さらに、出身地より重要なのが居住地であって、その居住地より重要なのが、現在どんな考えを持っているのかである。

単にその人の出身地だけで判断するとしたら、日本の大阪出身である大韓民国の李明博(イミョンパク)大統領は日本人であり、アーノルド・アロイス・シュワルツェネッガー米国防務省副長官はオーストラリア人である。

長年離れて育った実の子供より、今まで一緒にいた他人の子供がわが子に思われるかもしれない。黒い髪の外国人より、金髪の韓国人が韓国人であるのと同様だ。

しかし、我々大韓民国の社会は青色の眼と金髪をもった外国人、また、我々韓国人と似た顔型をしているが、外国人である人達に対する態度は、今の国際社会において決して尋常であるとは言えない。

時にはべた褒めしながらも、また、ある瞬間には、強く卑下する。

それは、国際化と言う見かけ倒しの美名がもたらした混同された矛盾が、この社会には広く根深く残っているからである。

その混載された矛盾は「Korea is gay」という幼子みたいな批判的な表現により、パク・ジェボムと言う一個人に向け、韓国の国民が彼に責任を追究し、ひいてはそれに民族的国家観念や自尊心などが絡み合い『パク・ジェボム事件』といった前代未聞の事件にまで問題が発展してしまつたのである。

しかし、ただ単に社会的な雰囲気考慮せず、「Korea is gay」と発言したパクさんが悪いと言うのであれば、それはあまりにも彼を追い詰めているとしか考えられない。このように、パク・ジェボム事件を通して明らかになっ

た韓国社会はもはや私にとって魅力的な社会とは言い難い感がする。韓国系海外同胞出身のアイドル歌手などがハンゲル語を間違えればそれはむしろ魅力であった。しかし、海外で生まれ育った彼らの思想であるアメリカンマインドが浮上した時、韓国社会は一瞬、正反対の態度で彼らを敵に回した。

見た目は韓国人だが中身は米国人であった韓国系同胞青年。この事件が起こる前までは多くの韓国人は彼らのアイデンティティに熱狂しながらも、ある瞬間、彼らを皮肉つたりもした。パク・ジェボム事件でわかるように、大韓民国の社会は、非同時性と同時性、魅惑と皮肉の両面の顔を映すヤヌスのような有様を呈している。

しかし、今回のように大韓民国の国民に対し極度の怒りと裏切り感を与えた心理的背景にあるのは一体何か。国籍なのか？ 階級なのか？ を考えた場合、その外見上は国籍かも知れないが、中身は階級の差によるものであろう。

例えば、英語が堪能で美人系の白人ハーフの子供たちは韓国の学校でも仲間たちの人気者であるが、それとは逆に顔が黒い東南アジア若しくはアフリカ系のハーフの子供たちは大韓民国社会においてイジメのターゲットになっているのはなぜか？

これは我々韓国人が彼らを韓国人でないから差別するといった単純な問題ではない。

このように、我々韓国人が持っている歪んだ差別意識の背景に存在する本質は、経済的な階級意識に基づくのではないか。

とくに韓国社会は儒教の影響力が根強く、権威主義が異常に強い国であり、その結果、現代社会において韓国人は初対面の人同士でも序列、すなわち、階級を明らかにし、上下の関係をしっかりと決めようとする傾向がある。

このようにあらゆる面で階級を明らかにしようとする文化の影響で国際社会においても、その階級を判断する基準が当該国間の経済力の差によって判断するようになった。

そして、その国家間の序列は人々を判断する序列にまで繋がったのである。

韓国の経済成長の過程で主に東南アジア出身者が韓国へ移住するようになり、自然と経済力の低い東南アジア国家に対する韓国人の優越意識は差別意識へとなっていた。

韓国人の多くは貧困な国に対し優越感を持ち、黒い皮膚を持った東南アジア人は劣等民族であるという人種主義が形成された。さらに韓国社会の強力な単一民族主義は自然と他民族に対する排他的な人種主義へとつながった。

もし、過去の歴史において、白人が黒人の奴隷であったとしたならば、現在黒人が主体となっているアフリカなどの国が全世界の経済帝国であるとしたならば、このような現象は変わっていると思われる。夜中、一人で道を歩いて

いても黒人よりは白人が後をついて来るほうがもっと恐怖感を感じるであろう。今回の件は平たく言えば白人だとわかっていたが、実際は黒人であったとの裏切られた感情。

堅実な同胞であったと知っていたが中身はチンピラであったと言う侮辱感にも例えられるが、ここには白人、米国民胞という経済的な主流とアメリカに対する羨望的な心理がその背景にあると言える。

このように、韓国人は多くの場合単一民族と純血主義に執着する人種的排他主義の態度を持っているにもかかわらず、白人に対しては劣等意識を、黒人や東南アジアの人達に対しては優越意識を持つ二面的な態度が根強く存在する。しかし、このような韓国社会における純血主義は一種の幻に過ぎない。ただ我々がこの幻に気づくことができないのは、この幻に「韓民族優越主義」という当為性と共に過去数年間政府によるイデオロギー即ち世界観として使われたからである。言い換えれば、このような韓国社会における劣等意識から生み出された純血主義は身分上昇の欲求をもたらしたのである。別の観点から見れば今回、パク・ジェボム事件は米国民胞に対する韓国社会の認識が米国民から渡ってきた特権と経済力をもった憧れのスターであったが、一瞬、米国民であるという差別を受け、憎みと怒りの対象になったのである。

さらにつけ加えると、海外へ移住した同じ韓国人には強

烈な愛国心を要求する反面、外見が違う外国人には異常であるほど抵抗感を表す矛盾した態度は、歪んだ劣等感の表れであるとしか言いようがない。

私自身も幼い頃、父親が博士課程の日本留学を終え、90年代韓国へ帰国した際、同胞たちの憧れであった一方、嫉妬の対象であったことは今でも忘れ難い。思春期も過ぎていない小学校の生徒たちが徹底した反日教育を教え込まれる一方では、ドラゴンボールやハローキティ、ワンピースなどの日本のアニメが受け入れられ、トヨタ、ホンダ、パナソニックといった日本の製品に熱狂し、毎年、日本への留学をするべく多くの韓国人学生が日本語の勉強や日本の大学受験に挑戦する。

このように我々韓国人は皮膚色の同じ東洋系の日本がアジアにおいて盟主の座に上ることを願いながら、それとは逆に、外形が全く違う米国をはじめとする欧米諸国に対しては卑屈な態度をとるほど、劣等感を表す姿を見せて来た。ひょっとしたら、我々が表すこの劣等感すら、間接的な形で過去欧米諸国の植民地遺産の影響を受けているのかもしれない。

私は今回の「パク・ジェボム事件」の問題について、根本的な立場で解決案を導く必要があると考える。我々韓国人の心の奥深くに潜んでいる劣等感と優越感、その優越感すら実は劣等感の表れであるのかもしれない。

未成熟なサッカー競技的な愛国心が、我々をこのようにさせているのではないだろうか。

これからの国際化する社会の中で、我が韓国社会が最優先に考えなければならぬものは、自国に対する強固な愛国心ではなく、人間の尊厳に配慮する心、すなわち、この世のすべての人を同じ一人の人格として認識する「人間愛」が、何より大切であると考えられる。

受賞の言葉

尹 柱鉉

本日、文芸思潮から社会批評賞受賞の栄光を受けることができ、誠に感謝しております。厚く感謝し、深くお礼申し上げます。

私は現在、日本の横浜薬科大学薬学部臨床薬学科第二年に通っております。

今回、エッセイ部門において少し過激かもしれませんが、今までとは違った観点から私の経験に基づきエッセイを書かせていただきました。これまでは、海外に移住して暮らす母国（韓国）の方々の苦しみ、他国からの差別が取り上げられたのが一般的でした。

ところが、少し観点を変えて考えると、また客観的

な資料に基づきましても、実際問題、民族差別並びに外国人に対して固定観念が異常的である国は、わたくしの母国である大韓民国であります。

作文の中で詳しく説明致しましたように、我が国（韓国）は人を判断する基準、値というものが、その人の出身校から成り立ちます。即ち、その人がどの大学学部を卒業したのかにより、一生その人の人生を左右するわけでありま

す。仮に他校へ編入したり、海外留学をしたところで、高校を卒業しての大学受験で進学する学部が基準となるわけであり

ます。このように、過去の李氏朝鮮王朝による儒教の影響により、いまだ人々の間では階級社会意識の固定観念が根強く残っているのがあります。そのため、現在では他人を判断する際、同じ韓国人同士であれば相手の職業、出身校、居住地、自家用車、子供の学閥等により上下の階級が決まっています。いくわけであり、このような意識は韓国以外の外国人に接する際もそのまま適用されるようになったわけであり

ます。今年、二〇一〇年八月二二日で日韓併合一〇〇周年になります。

この夏は日本国内閣総理大臣の日韓併合に関する談話もございましたが、どんなに時が立とうが韓国側の賠償問題

でも理不尽なことがあり、言語道断のことも起きています。しかし、ある事件が起きた場合再発を防止するためには原因を突き止め少しずつでも変えてゆく姿勢が必要であると思

います。最後に、永住者、帰化をする際、欧米諸国のようにその国家に対し忠誠を誓う審査が日本にはないと知っております。外国籍の人間が日本の永住許可、日本人として帰化を申請する際、その人が日本国のため、また自分が新たに迎える祖国に対し、血を流すことができるほどの忠誠心が

などの声は消えないと私は敢えて申し上げたいと思います。

わたくし自身も、昔、父親の日本留学（文部科学省博士課程国費留学生—東京工業大学）で一九八六年に当時三人家族で来日しましたが、日本での生活よりも、帰国後、母国での生活がしんどかったと申し上げたいです。

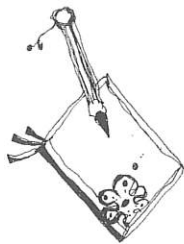
小学校（当時韓国では国民学校）の道徳の教育において徹底的な反日教育をさせる傍ら、小中高から大学、社会人に至るまでほとんどの文具は日本製を使い、乳幼児の赤ん坊に与えるものは可能な限り、日本製を使用しているのが現状です。日本製は信頼ができるからだそうです。

また、今も地元韓国では多くの学生たちが日本で学位を取るため日々日本の大学を目指して勉強に励んでおります。このような矛盾した現状においても彼らは一方的に日本国の謝罪、更なる弁償問題を主張しているわけであり

ます。極端な話、恥ずかしいことながらも、私の母国大韓民国の人々が日本国内で起こす犯罪は極めて広範囲に及ぶものだといえるでしょう。日本でお金を稼ぐためには手段を選ばない方法をとりながらも、日本を非難し、必要以上に権利を主張していると言えます。

私が、ここまで出身国の人々を非難するのはこのような問題が生じた場合、ほんの少しでも解決し、これからどうするか具体的な対策が全く行われていないことを世の中に訴えたかったからであります。もちろん、万国共通どの国

ない限り、一国家の存在は危険に陥るのではないかと私は申し上げたいです。今回、私の様な拙文が「文芸思潮」エッセイ賞社会批評賞を受賞したのに対し深く感謝し、厚くお礼申し上げます。誠に有難うございます。



尹 柱鉉

ユン ジュヒョン

- 1981 韓国マサン生まれ
 86 日本国来日（横浜青葉台）
 91 帰国
 94 韓国光明東国民学校（小学校）卒業
 97 韓国 富明中学校卒業
 2000 韓国ケイナム高等学校卒業
 00～01 韓国 予備校街で浪人生活
 00 韓国 soonchunhyang 大学理学部生命科学部入学
 03 日本私立東京理科大学薬学部製薬学科入学
 05 日本私立東京理科大学薬学部製薬学科退学（徴兵制度）
 05.4月～10月（徴兵国家所属勤務）
 06 韓国 soonchunhyang 大学理学部化学科2年（転学科）
 07 韓国 soonchunhyang 大学理学部化学科3年（転学科）
 07 日本国毒物劇物取扱責任者京都府知事第19-121号
 08 韓国 soonchunhyang 大学理学部化学科4年（転学科）
 09 日本私立横浜薬科大学薬学部臨床学学科入学
 10 日本私立横浜薬科大学薬学部臨床学学科第2年

闘病と猫と

守屋正雄

地元の零細企業の印刷屋に就職して十年と数ヶ月が過ぎたころ。

十一月最初の日曜日、生垣の刈り込みをしていると、不意に、ザラツとした感触が咽喉に込み上げた。吐いた痰状のものは錆色をしている。作業を続ける気力が抜けてしまった。

一時的な現象だろうと見くびって勤めには出たが、一向におさまらない。だんだん激しくなる。

三日ばかり経って病院へ行った。

「どうしてこんなにひどくなるまで放ツといたんだッ。患者ってというのは、どうにもならなくなつてから、何とかしてくれて泣きついて来るんだからッ」

検査が済んで担当医の前に座つたとき、いきなり浴びせられた言葉である。

んに血痰が込み上げてきて、とても寝るどころではなかった。ソファに枕と座布団を積み上げ、うつ伏せに頭を置いてみた。座っていると血痰の頻度が少なくなり、うつらうつらできた。

頑張つて勤めを続けたかったが、やはり体がきつく、よつちゆう腰を下ろしたくなつたりということもあつて十二月半ばに退職した。私は還暦を迎えていた。

暮れには手術を勧められた。

「薬を飲んで治る病気じゃねえんだから——。ただし、大変難しい手術だから、これを受けるには勇気が要るよ。一生寝たつきりになつちやうかもしれねえしな」と医師は私を脅かした。

しかし、この医師には手術されたくなかった。そのため、年が明けて最初の診察を受けたときにも、手術をお願いしますがと言えなかつた。

ようやく私が入院を決心できたのは、威張り屋の医師がふと洩らした一言によつてだった。

「なにも俺が手術するわけじゃねえけどな」

この病院ではできない大手術だからということ、F市にある都立病院を紹介されたのだった。

入院する前に、私にはすることがあつた。膿胸が発覚す

その日から翌年の三月まで通院することになるのだが、その中年医師の暴言が止むことはなかつた。金を払って診てもらうんだから、こつちは客だろうがと言つてやりたかつた。

病名は膿胸だった。膿が溜まって肺を圧迫し、左肺が機能していないという。この病名を知る人は少なく、えッ？と大抵聞き返された。

病状は進行していた。錆色の痰は真つ赤に変わった。外出していてもところ構わず咽喉に込み上げてきて、近くにトイレがあれば大急ぎで飛び込まなければならぬ。トイレもないときはハンカチに浸み込ませる。一枚では足りないから四、五枚は持ち歩く。人通りの絶え間をねらつて歩道の端へ吐き捨てたりもした。

横になつて寝ることもできなくなった。横になつたとた

る一年ほど前、物置部屋にしている三畳間で、雌と雄の乳飲み子を連れた猫がボール箱の中に居ついてしまったのだ。ノラには見えない綺麗な親猫だった。ところが子育て中だというのに、また妊娠したような気配があつたので、罪なことをとは思つたが、夜に自転車車を三十分あまり飛ばし、真つ暗な田舎道に捨ててきた。

事情を知らない残つた二匹の子猫は飼ひ猫同然に振舞い、いまではすっかり情が移つてしまつていた。独り立ちできるようになつたら捨てるつもりでいたのが、もはやそんな気持ちちは失せていた。

結局町内の動物病院へ預けることにして、二匹をいっぺんに運べる大き目のカゴを借りてきた。こんなときは車があれぼと思う。運転もできないのにそう思う。

カゴに押し込もうとすると二匹ともありつたけの力で反発し、瘦せ衰えた私の手には負えなかつた。

「そんなにイヤなら、いいよ、いいよ。——二人だけでおウチにいられるか？ 明日つから遠くへ行つちやうなんだヨ。いじめ猫が来たつて助けてやれないんだヨ」と囁んで含めるように言い聞かせた。

三月二十五日、猫に心を残しながら入院した。一人暮らしの私にとって猫はペットではなく家族だった。入院して私が先ずしたのは、猫に食事を与えるために週に一度の外

出許可を得ることだった。

手術はすぐにはできないわけではなかった。左脇腹に穴を開けてチューブを通し、一ヶ月は徹底的に患部の洗浄だといふ。

二日目からは横になって寝ることができた。五ヶ月も座ったまま寝てきた身にとつては、医師から「大丈夫！横になってごらん」と言われても、そうしたらまた血痰が込み上げてくるのではないかと、恐る恐る横になった。そのときの嬉しさ！ あー、と思わず声を上げていた。横になつて寝られる！ その当たり前なことを、このときほどありがたく幸せに感じたことはなかった。

三月三十一日はじめての帰宅日だった。一時間弱の距離とはいえ、かなり疲れたが、猫たちを放っておくわけにはいかなかった。

一週間、二匹だけで無事に過ごしてくれただろうか。私は足がすくむ思いで庭に入った。

「ブッチャーん！ クロちゃーん！」と大声で呼びながら玄関を開けた。

二匹ともいなかった。家を出てしまったのか——遊びに行っているだけなのか——。

固形の餌は一粒も残さずなくなっていた。

私は敷きつ放しの布団に転がった。そして細く高い声で

駅のホームまでも届いた。

四月二十一日が手術前の最後の帰宅になった。手術後の外出できない三週間のために大きな袋入りの固形の餌を三つまとめて買った。野良猫も数に入れなくてはならない。

この際やむを得ず、猫の世話を隣家に頼んだ。週に一度、畳の上でかまわないから一袋全部空けてやってほしい、と。水は大鍋に用意した。

手術後はじめて帰宅できたのは五月十九日だった。

待ちかねて帰ってみると、クロとブチが珍しく揃つて家の中にいた。水を入れておいた大鍋の底を恨めしげに見つめている。鍋に水は一滴もなく、底には蜘蛛が張りついて死んでいた。鍋の底を見つめていれば水が湧いてくるとでも思っていたのか。二匹がたまたまなく愛おしかった。

入院して丸二ヶ月目の五月二十五日が退院日だった。たった一人の、仲のあまりよくない姉はとうとう一度も見舞いに来てはくれなかった。

その後一週間ばかりは、二匹ともほとんど終日私にへばりついていた。朝晩のトイレタイムには私も付き合つて庭へ出た。十分ばかり遊んで家に入るのが習慣になった。

六月の初めだった。薄闇の迫った庭から家に入ったとき、ブチがついて来ない。五分、十分と過ぎてても入って来ない。

二匹の名前を呼び続けた。ふだんから猫の所在が不明なときのやり方だった。

ほぼ一時間後、出入り口のある台所でニャゴニャゴと鳴く声が聞こえた。私は体調の悪さも忘れて飛び起き、ブチを抱きしめた。重くて抱き上げられないブチは立ち上がつて私にかじりついた。

缶詰を一缶平らげたあと、甘えん坊のブチは私に寄りかかったまま、ウオンウオンといつまでもすすり泣きを続けた。突然私がいなくなつて心配したこと、おなが空いたこと、苛め猫が侵入してきて逃げ回ったこと。それらを訴えているのに違いなかった。

こんなふうには、猫が、人間のようには、心情を訴えることができるのか……。ごめんね、ごめんねとひたすらブチの背をさすつてやった。

病院の門限の八時に間に合わせるには七時前には家を出なければならぬ。

クロはとうとう現れなかった。

ブチは安心しきつて眠っていた。不憫だった。

クロは二度目の帰宅のときに戻っていた。クロはブチほどには甘えた仕草を見せなかったが、庭から路地への出口まで追つてきて、凄まじい声を私に向かって張り上げた。それはまるで犬の遠吠えだった。私を恨むようなその声は

心配になり、荒れ放題になっている庭を探し回ったが、無駄だった。

ブチは消えていた。

入院していた丸二ヶ月間を無人の家で頑張ってくれたというのに……。何がブチの心に起きたのだろう。もしかして二股？

私が無事に退院したことを見届け、安心してクロを残していけると思い姿を消したのだろうか。無理にもそう思いたかった。



心臓の手術後の経過があまり思わしくなく、その上眩暈やら何やらで体調が悪く重い気持ちでいたところへ受賞のご連絡をいただき、心に明るいものが差し込みました。この喜びを自分の胸一つに納めておかず、誰かに伝えたいと思う。でも、天涯孤独な私には口を利く相手がいない人間って、古希も過ぎると、次第に孤独と仲良くなるものです。現在私が口を利ける人は、病院の先生と看護婦さんと、回覧板を届けてくれる隣家の主婦だけです。こんな孤独の空しさを、受賞という非日常的な出来事が当分の間追いついてくれることでしょう。それから、まだ会ったこともないたった一人のメル友に報告したことはいうまでもありません。ありがとうございます。



守屋正雄

もりやまさお
1937 横浜生まれ
中卒後、織物工場を皮切りに様々な職業を転々とし、取り返しのつかない出鱈目な人生を送ってしまった。

文芸思潮臨時増刊号

エッセイ宇宙

5

THE ESSAY COSMOS

第6回「文芸思潮」エッセイ賞作品集

第6回エッセイ賞の作品を集めた豊かなエッセイ集
エッセイ宇宙が豊かに広がります

アジア文化社

12月下旬発売予定 945円(税込)

ご注文はアジア文化社まで

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848

我が国には再びない中国北京での

少年の目から見た植民地生活の反省と回顧録

蘆溝橋

定価 1300円 (送料込)

東山昇 著

遠足の頃

千葉日報社刊

注文先 アジア文化社 ※御希望の方はアジア文化社に御連絡下さい。

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13 TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848

E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

眠れないひめの朝

羽鳥尚子

眠れない夜が好きだった。眠れないなら眠らずに、自分でつくったお話を、自分に聞かせて夜じゅう過ごす子供だった。

十二のときに、カーテンを開けたまま、ベッドに入ることを覚えた。星の送る淡い光が、向かいの壁に白く窓の私たちを映した。たまに車が近くを通ると、ライトがさあつと庭を撫で、木々の梢の、重なる葉群れの濃い影が、黒々と部屋を過った。半透明の庇越しの満月は、海の底から見上げたように揺れていた。

夜を彩る仄かな影の中にいると、何時間眠れなくても、少しも苦になることはなかった。

十七のとき、眠ろうとしても眠れない夜がやってきた。

よく開ける音。次いで、今夜も遅い妹を叱る母の声がした。妹がなにか口答えし、そのまま階段を駆け上がる。隣の部屋のドアが、バタンと閉じられた。

エンジンの音が去り、闇と静けさが戻った。

悩みの合間にほんの少しうとうとして、そのたび同じ夢を見た。夢の中で、わたしは学校にいた。やめたはずの高校ではなく、どうにか卒業した中学校だった。遠足に行った。体育大会があった。長い廊下をクラスメイトと、プリントの束を抱えて歩いていた。みんなやさしかった。わたしは優等生だった。なのに授業中、指されもしないのに立ち上がって、こう言うのだった。

「わたし、学校をやめます」

夢の中の自分の声に突かれたように目を覚まし、東の窓から漏れる薔薇色の光に気付く。そっとカーテンを寄せる。と、山の縁が濃い金色に染まっている。

声も立てずにわたしは泣いた。

十代のおしらいから二十代の始めにかけてを、そんなふうに、わたしは過ごした。

二十歳を過ぎると病気は落ち着き、少なくとも手を縮めることはなくなった。その代わり、拒食という症状がやってきた。

食べて『大きくなる』ことに、わたしは怯えていた。体

カーテンを閉めきった真つ暗な部屋で、毛布を頭の上から被って、ぎゅっと固く目を瞑って、十六のとき始まった心の病気のことや、その原因となった学校での出来事や、この先の、ただ落ちてゆくばかりに違う人生について、ぐるぐると考えていた。

当時のわたしは、この世のすべてが汚れているように、と同時に、わたし自身がなにより汚れているように思っていたので、自分を汚さないように、それ以上に世界を汚さないように、胸の前で両手を組んで過ごしていた。だから毎晩、ベッドの中で腕が攀った。

腕の痛みに耐えていると、数人の男女の笑い声がする。おそるおそる身体を起こし、窓の方へ顔を向けた。車のライトの強い光に照らされて、カーテンの小花模様が目についた。忙しく駆けて来る足音と、玄関の引き戸を勢い

重が、ちよつとでも増えるのが恐かった。美しさのために痩せたいわけではなかった。自分がみつともないくらいに痩せていると充分に承知していた。太るのではなく、歳をとることが、食べて、成長して、『体格のいい、中年のおばさん』になるのが厭だったのだ。

（だって、わたしはまだなんにもしていないのに）
わたしは十六歳だった。最初に手を洗った夏の終わりの夕方から、一歳だって歳をとってはいないはずだった。身体を内から蝕むような空腹を抱えて、他人の書いた、自分の書いた物語の中に、わたしは身体を横たえた。そうしていれば何十年でも十六歳のままでいられると、頭のどこかで信じていた。

そんな夢が途切れたのは、役所の書類に、『年齢・三十歳』と記入したときだった。

そうして、わたしがなにをしたのかといえは、文章の投稿と、食べ物の量を増やすことだった。世の中に出ることは、まだ恐かった。食べることすらできない自分が、まともになってゆけるはずなどなかった。

体重が五キロ増えたところで、原因不明の吐き気に倒れた。ストレス性のもと診断され、安定剤を出されたが、快復の気配はない。実は腸管癒着症だと判ったのは、それから更に一年経ってからだった。



羽鳥尚子

はとり なおこ

1971年11月生まれ
群馬県立渋川女子高等学校中退
群馬県立高崎高等学校普通科通信
課程在学中
来年度卒業予定



ポケットの回数券を探る。つま先立ちの踵から、影が後ろへ伸びてゆく。
週に二度の登校日。日曜の朝、七時九分。オレンジ色のバスが来る。

受賞の言葉

羽鳥尚子

長い間家の中で、ひとりで本を読み、文章を書いて暮らしていました。当時は読むことと書くこと以外はなにもいらない、誰にも認められなくても、ただ読んで書いていければいいと本気で思っていました。

そんなわたしが、ふとした思いつきで通信制の高校に入学したのは、二〇〇七年の春のことでした。最初のうちはまだ書くことの方が大切でしたが、友人や行きつけのお店ができるようになった頃から、以前ほどには書くことに魅力を感じなくなっていました。忙しさもあります。二〇年ぶりに触れた現実という書物にすっかり魅了された餅は喰えん、ということでしょうか。
そんななかで書いたエッセイが賞を頂くことになり、正直嬉しさ半分、戸惑い半分といった気持ちです。

こちらが狼狽うろたえてしまうくらい褒めてくださった先生、いつも書け、書け、書いてるか、と急かしてくださるK先生、世間知らずのわたしを温かく見守ってください。他の先生方、この学校で知り合うことができた皆さんのひとたち、そして拙い文章を認めてくださった選考委員の方々、本当にありがとうございます。

これからも書くことを続けてゆきたいと思います。

「昔、お腹の手術した？ 盲腸？ ああそれだ。その後遺症で、腸が一部通過が悪くなっているんだね。ストレスで小食？ 胃腸科の立場としては、小食でちょうどいいくらいなんだだけどねえ。まあ、これからも食べすぎないように」

胃腸科の先生はこう言って、食事の摂れない疾しさからあつさりわたしを解放してしまった。

それから暫くは、癒着とストレスのために食べられず、胃腸科と精神科の両方に通院する日々が続いた。

わたしは腕の血管が細く、乳幼児用の針を使うので、薬剤の点滴も、普通の人の倍以上の時間がかかった。診察室の隅に横になり、お年寄りや、サラリーマンや、小さな子供や、看護婦さんや、たぶん同じくらいの歳の、働いている、家庭のある、恋人のいる女性たちが、出入りするのじっと見ていた。自分が身体を伏せていた二十年の間に、外での世界で流れた時間について、初めて考えようとしていた。

三十五歳の誕生日のひと月前に、安定剤を全部棄てた。断薬による副作用は、一切なかった。

読むことも書くこともちがう、ベッドに横たわって眺めるだけのものでもない現実が、わたしの中に戻ってきた。

十月半ばの、よく晴れた朝だった。

ベッドから起き上がって伸びをした。長い間、自分の世界のすべてだった、本の詰まった大きな棚と、たつたひとりの友達だった白いねこと、小枝のような自分の足を見回した。

パソコンのフォルダに収められている書きかけの原稿の文字数は、この二十年でわたしが喋った言葉の数より多かった。

半年後、県立の通信制の高校へ、入学希望の電話を入れた。生まれて初めて知らない町をひとりで歩き、道に迷い、自動販売機のコーヒーを飲んだ。コンビニのおにぎりを食べ、ポケベルを飛び越えて携帯を買った、五パーセントの消費税を払った。

そうして今、やっと二十歳はたちになったわたしは、バス停にひとり立っている。

山の嶺から朝日が覗く。うす水色の空が輝く。二十年前にはなかった住宅街の家々の、東の壁が一斉に、レモン色に染め上げられる。

澄んだ風が髪をなぶる。排気ガスの匂いと、重いタイヤの音が近付く。教科書の詰まったリュックを背負い直し、

死者とダイナマイト

木戸竜之介

太平洋戦争の末期、昭和二〇年八月に入って間もない日の朝であった。湿度の高い曇天が重苦しく頭上にあつた。一本の簡易舗装された長い通勤路の右の端を、側溝に沿って私はうつむき加減に歩いていた。前も後も同じ所へ通う通勤者で、自然な同一歩調で粛々と職場を目指していた。

右側の側溝の中に男は仰向けに倒れていた。カーキ色の国民服を着て足にゲートルを巻き、両方の手のひらは胸の前で合掌したげに近寄っていたが、合わさることもなく、一〇センチ程離れたままになっていた。両肩は側溝にはさまれ、肘を側溝の両側の壁が支えていた。目は半眼で白目になっており、灰色に青を混ぜたような顔色だった。私は一目見て、死んでいると察知した。これだけのことを、私は側溝に沿って彼の足元の方から近寄り、死体と平行にその

左を通って彼の頭を越して行くまでの一定歩調の歩みの中で、見るともなく見たのである。蟻の行列のように赤羽の造兵廠へ通う人の列が続いているのに、一人として死者を振り返ることもなく、歩調の乱れる人もなかった。

私は旧制高等学校の一年であった。八月一日からの動員先が赤羽の造兵廠で、配属されたのは空の倉庫であった。担当の陸軍将校からは、昭和電工が空襲で爆破されたため硝酸の入荷が止まったままで爆薬の製造はできない、諸君には蛸壺塚を掘ってもらおうと言いわたされた。我々は毎日、直径も深さも一メートル位の円筒型の穴を、スコップをふるって言われた所へ掘った。廠内の道路という道路の脇に、一定間隔で実にたくさん穴を掘った。ここは米国

から見れば代表的軍需工場だから、毎日どこか一日に二回以上も空襲される日がある。爆弾の大型のものは、深夜にB29爆撃機が落としていくが、我々のいる昼間は、もっぱら、ずんぐりしたグラマン戦闘機が中心の艦載機が来て、道路に沿って機銃掃射をしていく。空襲警報は間に合わないときがあり、機銃掃射が突然始まるから逃げる暇がない。そこで道路にいる人は道路脇の蛸壺塚へ落下するように逃げこむしかない。蛸壺はそのためのものであった。ずっとスコップで固い土と格闘していると、腰も脚も背中也堪えきれないほど痛くなってくる。そこで腰を伸ばすためだと言って二時間ごとに三〇分間、徒手体操とか軍事教練とかをやらされる。そんな日が続いていた。

造兵廠の建物は整然と数十メートルの間隔をあけて並んでいた。高さが三メートル位の厚い土塀で囲まれていて中の建物は全く見えない。その建物は、厚みが一メートル以上ありそうな鉄筋コンクリートの壁でできた平屋で、窓は皆無であり、外光は天窓のようなところから入っていた。屋根を下から見上げると、天井はないから、鉄骨の骨組みの間から安物のブリキだかトタンだかの波板のデコボコが見えている。現場の人に訊いて見ると、爆薬製造中に事故が起きて爆発しても、爆風や火炎が隣の建物には絶対に影響しないよう、爆発のエネルギーは、初めから弱く作ってある屋根を吹き飛ばして大空へ抜けるようにしてあるのだ

という。我々の立っている床も、現場責任者が危険を感じて或る操作をすると、抜けて落下するようになっており、下には水をはった深いプールがあるという。しかし、我々の配属された建物には製造設備は全くなく、倉庫として使われていた。

よく晴れた日の午前であった。私達の倉庫からは大分遠いところに、建物の全くない草原があり、そこで私達は整列して、腰を伸ばすための徒手体操をやっていた。突然、空襲警報のサイレンが鳴り始めた。私達を引率していた将校は、避難するからついて来いと怒鳴って駆け出し、私達は二列になってそれに従った。一番近い建物まで来ると、入り口の前で整列させられ、

「お前達の倉庫へ戻る時間はないから、この倉庫に避難してもらおう。この倉庫には大量のダイナマイトが保管されており、その上に木の板が敷いてある。お前達はその板の上に座って空襲の終るのを待て。危険だから乱暴な動作は禁止する。そつと歩いて行って、そつと座れ。直撃を受けない限り、すぐ外で爆弾が破裂しても、外壁が丈夫だからダイナマイトが爆発することはない」と告げられた。

この建物も基本的には私達の倉庫と同じ作りだが、床板もその下のプールの水もなく、地下の床には、台のような物があるかも知れないが、そこからダイナマイトが積み上げられ、最上部はほぼ地面の高さになっていた。私達が静

かに胡坐をかいて座るとすぐ、戦闘が始まった。造兵廠の周りには幾つかの高射砲陣地があり、味方の高射砲が発射されるたびに、その衝撃や振動が地面を経てダイナマイトを揺すり、その上にいる我々に伝わってくる。そのうちに爆弾の着弾する轟然たる振動も伝わって来るようになった。銃砲撃音、爆発音など音響は耳を聳るばかりに聞こえるが私の全神経は尻に集中してしまっていた。この空襲の間、私は尻に感じる衝撃と振動が、こんどこそダイナマイトを爆発させるのではないか、それに完全に気をとられ、そのほかにも何も考えることができなかった。

一時間半程で空襲警報は解除になり、真つ青な顔をした我々一同は自分達の倉庫に戻った。

八月一五日正午、録音による昭和天皇の終戦の詔勅を講堂で聞いた。その後、いつもの倉庫に戻った我々は、午後及び明日からの作業については追って指示する、それまで職場で待機せよと担当将校から告げられた。午後一時過ぎに、突然、聞き慣れたグラマンの爆音が頭上を通過し、一瞬ギョッとしたが、戦争は終わったんだ、もう射撃してはこないだろうと思った。そのとおりで、機数は増していったが一発も撃たれない。

翌日、グラマンは、もう来なかった。我々は色々な職場の事務室へ行かされ、大量の書類を持ち帰り、それを古撃弾の恐怖と戦闘の大音響、下からはダイナマイトを突き上げて来る衝撃や振動、その間に挟まれたら半狂乱になって暴れてしまう方が自然であるし、四十数名の内の一、三人は発狂していてもおかしくはない。しかし、我々はその一時間半の間、仏像の如く整然と座り続けた。これもまた異常だと言わざるを得ないだろう。

一顧だにせずに死者の横を通過したことを「おかしい」と思った私は、普通の人間に戻っていたから、そう感じたと同時に、それと入れ違いに「変わる以前の戦時中の心」にはもはや戻れず、その詳細な記憶は失われてしまった。

今日の精神医学によれば、人に精神的肉体的苦痛を与え続けると、人は自分を守るために心の麻痺を起こし、自分に鈍感になって痛みを軽減するのみでなく、他人の痛みにも鈍感になるため残酷になるといふ。この精神医学の一つの説が、唯一、死者との遭遇とダイナマイト上の拷問とに対し、私のとった行動を説明できるものだと思う。

しかし、科学的に原因を指摘され、頭脳的にはそれを理解しても、人の心はそれですべて納得できるものではない。私はダイナマイト上の経験については、納得してもよいと思うが、どうしても、それでは済まされることがある。私は、あの終戦に近い日に、平然と死者の横を通過して何とも思わなかったのが、この自分であるという事実が頭を離れないのだ。私は、かつて、そういう慈悲の心の枯

びた平屋の日本家屋に押し込んで、屋内外に灯油を撒き、火をつけて家屋ごと全焼させた。こうして私達の学徒動員は終了した。

終戦から数年たち、平和な時代のサラリーマン生活を過ごしている頃になって、私は冒頭に述べた側溝の中の死者のことが妙に気になりだした。あの造兵廠へ通う長い人の列は、あのルートを通る人だけでも数百人はいたと思われるのに、立ち止まる人も、振り返る人も、一人もいなかったことが、異常なことに思われてきたのである。

死者と出会ったとき、何か反応するのが人間の本性ではないのか。

一顧だにしないのは異常ではないか？

私は夜毎に空襲の中で消火活動が続けてはいたが、空襲による死者を見たことはなく、四、五月頃の空襲の夜に近くの隣組で蛸壺塚に入っていた大学生が、背中のまんに焼夷弾の直撃を受け、破裂した腹を飛び出した自分の内臓に埋もれて死んでいったという話を生々しく聞いたことがあるのみで、死者に出会うことに慣れていたわけではない。死者を見て何も感じないことが、人として異常なのであれば、私達の体験したダイナマイト上の一時間半を、どう思えばよいのだろうか。普通の人間であれば、数メートルも積み上げたダイナマイトの上に座らされ、上からは直

れ果てた人間であったという思いが、心の奥底に澱のように残ったままになっている。



木戸電之介

きど りゅうのすけ

- 1929 (昭和4年) 東京生まれ。81歳
 51 東京工業大学応用物理学科卒業
 同年4月 東京計器(株)入社。
 以後、同社にて船舶用計器の研究開発に従事
 68 工学博士(東北大学)
 87 紫綬褒章(ジャイロ装置の発明)
 2005 同社退社
 08 「荒る、海」で第4回銀華文学賞当選
 09 「自爆」で第5回「文芸思潮」エッセイ賞優秀賞受賞
 栃木県那須塩原市在住

娘達が学生だった頃に、戦時中のことを書き残しておいてくれと、よく言われ、ウンウンと答えながら、何も書かなかった。

私の心の中には戦争に関して、どうしても書きたくないことと、書き残したいこととの二群があり、前者の方がずっと多く、それが引つ掛かるので私は何も書けなかったのだ。

私以上にそう思っている人の一人が、九〇歳で天寿を全うした私の母だった。私はそれを知らず、母が七七歳の時、自伝を書かないかと話した。母はそれから三年位で自伝を書きあげ、ずっと後に私はそれを自費出版した。

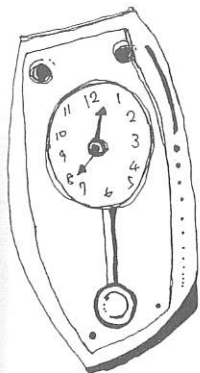
明治の日露戦争を子供で体験しており、大正から昭和へと、母の記憶は実にしっかりしているが、私の幼い頃の昭和の初めて終って、私達夫婦と過した戦後の三〇年以

上の日々についても、かわいがった五人の孫についても全く書いてない。日支事変から太平洋戦争の時代を大人として生きた母は、どうしても、その時代以後のことを書くことができなかった。書くことを拒否したという方が正しいかも知れない。

母と心の中がよく似ている私が何とかして書き残すべきことを書くとしたら、エッセイの形をとって、一作品毎に一テーマを選べば何とか書けそうに思い、昨年からそれを実行に移した。

この夏の暑い或る夜の一〇時に電話が鳴った。五十嵐編集長からの優秀賞の知らせであった。私は受話器を置いてから、戦時中のことを書くには、私には、やはりエッセイの形しかないのだと、あらためて思った。

この作品を真剣に読まれ、評価して下さった選考委員の皆様、心から御礼を申し上げます。ありがとうございます。



似た者同士

矢尾博子

翻訳の仕事から世界が見える、と言ったら大袈裟だろうか。

数年前になる。ある翻訳会社から、一年契約で、連載物の仕事を二件受けた。共にクライアントは※出版社である。最初に送られてきたのは、マーケティング界の鬼才と呼ばれる某男性著述家のニュースレターと、そのマーケティングの成功例を集めた小冊子だった。

当時アメリカは、イラク侵攻の混乱を受けて経済は低迷し、ブッシュ前大統領の支持率が急落していた頃で、ニュースレターは、そんな彼の国の世相を幅広く取り上げている。

常日頃、十分な専門知識も興味もない機械や電気関連の原稿を前に、熱い鉄板の上のお好み焼きをひっくり返すように、日本語を英語に、英語を日本語に、並べ替えている

だけの現実に甘んじている翻訳者としては、水を得た魚のごとく、俄然、張り切った。これこそ、本物の翻訳の仕事ではないか。しかも、依頼元は出版社だ。もし幸運の女神がやさしく微笑んでくれたら、将来、この人の著作の翻訳者として世に出る可能性だってある。これは頑張らなちや！

だが、原稿を読み進むうちに、次第に気が重くなった。読み終わる頃にはバカバカしいというよりも、一抹のむなしささえ感じた。

ニュースレターは同氏が経営するコンサルティング会社の会員向けのものだが、いわゆる卑猥な四文字言葉 (dirty four-letter words) が散見された。

四文字言葉は珍しいものではない。アメリカ映画など見ているとしょっちゅう出てくる。

だが、話し言葉と書き言葉は違う。小説ならいざ知らず、報道記事やビジネス文書等で四文字言葉が使われているのを見たことはない。

しかし、それ以上に落胆したのは、文法上の間違いが多いことだった。スペルの間違いを見た時には、やる気が失せるといっても腹が立った。まともな教育を受けた人間の英語ではない、と直感した。

私は決して学歴偏重の人間ではない。

アメリカは日本のような学歴偏重の国ではない。だが、学歴に関係なく、一応の成功を収めた人は、それ相応の文章を書く。

アメリカの大学で、歴史の教授が言った。

「文法やスペルの間違いがあるようなものは読みません。読んでもらいたいなら、自分の書いた文章にミスがないかどうか、提出する前に友人にでもチェックしてもらいなさい」

政治の教授は言った。

「スペルミスが三個あったら、それ以上はもう読みませんから」

一流雑誌の花形記者も小さな地方新聞社の記者も皆、そんな風に鍛えられ、日々勉強していったはずだ。

こんないい加減な人間が書いた文章を頑張っている日本語にしようなんて、原価五〇円の粗悪品を一〇〇〇円で売

りつけようと、せつせと綺麗な包装紙に包むようなもの、バカバカしい!

だが、原稿がひどいからといって、そのままひどい日本語にしたのでは次の仕事が来なくなってしまう。小沢一郎が二〇秒おきに「エエー」と言ったからといって、通訳者も一緒に「エエー」と言ったのでは即刻クビだ。

忸怩たる思いを抱きながら、とにかく頑張って仕上げた。

ニュースレターと小冊子の翻訳を終えると、次は自己啓発セミナーの第一人者を名乗る某女史の原稿が送られてきた。

女史は、毎月、各界で活躍している泰斗にインタビューをする。その英文トランスクリプトを日本語に訳すのだが、最初のゲストは、誰であろう、マーケティングの天才その人で、二人は旧知の間柄ということだ。

女史の英語も、また、ひどかった。

こちらはインタビューだから話し言葉である。文章とは違って、話し言葉に一貫性が欠けるのはよくあることだ。以前にもトランスクリプトの翻訳をした経験はあるが、女史の場合は、突然話が飛び、次のページに来てやつと繋がりが見えてくるのはしょっちゅうで、目的語が何を指しているのか理解できないこともしばしばだった。私はアメリカのジョン・ステュワートやレイチェル・マードウ等のト

ークショー番組を見ているが、レイチェル・マードウの理路整然たる英語に陶然として聞き惚れることもあるのに、この女史の英語たるや、その文法のひどいこと。しかも、スペルミス。単語の違い。単数形と複数形の違い。

あまりのひどさにピンと来た。女史の対談テープを起こしたのは英語を母国語とする人ではなく、インドやアルゼンチンあたりの会社へ発注してはないか。グローバル・ネットワークの時代だ。送信ボタンをクリックすれば、地球の裏側まで原稿を送るのに一分とかからない。アメリカ人勤労者の一〇分の一くらいの料金で済むはずだ。

その思いが確信に変わったのは、これは英語ではないと思う文章を見たときだった。前後の脈絡がまったく繋がらない。

course and 4's..... コースと四の? なに、これ? なにが言いたいんだよ!

前後を読みなおす。嘆息しつつ、威圧と力 (coerce and force) と訳す。

おそらく、地球のどこかで女史のテープを書き起こしていった人も、女史は、毎月会員に売り込んでいる自己啓発セミナーDVDのトランスクリプトが正確に書かれているかどうか、チェックさえしない人間だということに気づいているのだろう。

いや、もっと大切なことを識っているのだろう。

女史は、ある時、自分は南部の田舎で育って教育を受けていない、学歴が低いというコンプレックスを乗り越えてきた、と語っていたが、出自や学歴よりもっと大切なものがある、ということ。

人には、みな、その人となりというものがある。天性なのか、与えられた境遇の中で培われていくものか、その人その人に備わったものがあって、それは、あえて語らずとも、おのずと伝わるものだ、ということ。

マーケティングの神様の、ニュースレターから伝わって来たのは、尊大さ、傲慢さだった。

世は不況だなどと暗いニュースを煽る一流大手メディアの言うことなど信じてはいけない。決して不況ではない。市場は伸びている。大いに投資し、宣伝していくべきだ

.....

では、効果的な宣伝とは?

天才氏は、ある号で、有名人を活用しよう! と呼び掛けた。

ある時、有名人と一緒に写っている写真をDMに使用して成功したそうだが、その有名人と親しいわけではなく、合成写真を作ったという。彼は、まるでそれが素晴らしいアイデアであるかのごとく自慢する。当の有名人から了解をとってあるので法的にはなんら問題はない。大切なのは、人の注意を引くこと、ヘエー、あのセレブと友達なのか、

と思わせること……。

日本にも昔から羊頭狗肉という諺があるが、天才が聞いて呆れるような代物ばかりだった。そして、そんな同氏に称賛の言葉を送る女史。

いったい誰がこんなものを読むのだろうか？ 母校の教授たちなら一顧だにしないだろう。

毎月送られてきた原稿から見えてきたのは、同氏の著作や女史のセミナーDVDを購入する会員とは、底の見えない不況のもと、なんとか売り上げを伸ばそうと苦心している中小企業や小売店の経営者たちで、毎年アメリカ全土で開催されるセミナーの料金は驚くほど高く、参加者は講演者の新刊やDVDを購入させられるらしい、ということである。

そして女史が紹介する「今月の素晴らしいゲスト」は、斯界の泰斗どころか、同氏の会社の共同経営者であり、講演仲間であり、お互いの商品を褒めあい宣伝しあっているのだ。

共にアメリカでは有名で、フォーチュン誌のトップ五〇〇企業を相手に講演を行い、世界を舞台に活躍しているとの触れ込みだが、一流の企業がこんな連中に社員研修のセミナーを依頼するなんて、本当かな？

私は、翻訳会社のコーディネーターに、この仕事、おかしくないですか、この人たち、一種の詐欺師じゃないですか。

同士だと知った上で※社と契約したのだろうか。どうして分かったのだろうか？

きつと、立派な肩書が語るよりもさらに雄弁に伝わってきたなにかに、相通するものを感じたのだろう。

著名な翻訳家でもなければ、翻訳の仕事から世界が見えるなんて、大袈裟だ。

だが、私のようなしがない無名の翻訳者でも、グローバル・ネットワークという鏡に映る世界が、ほんのちよっぴり、見えてくる。

受賞の言葉

矢尾博子

重いタイプライターに手打ちで、修正インクは必需品だった我が留学時代から見ると、今は夢のようです。ワードなるソフトを発明した人はなんと凄い天才かと感嘆することしきり、スペルミスも文法の間違いも即座に知らせてくれるのですから。にもかかわらず、スラングやスペルミスがあっても正確に理解できる翻訳者募集という求人広告を見た時には、私のような思いをする人は少なくないのかなと思ってしまうました。

そして、どうでもいい粗悪品を一応もつともらしい商品にして出す翻訳会社がある一方で、日本の出版社の怠慢さに驚かされるが多々あります。翻訳会社は熾烈な競

か、と言おうかと迷って、結局、なにも言わなかった。

アメリカ人は、白人なら、みんな同じ英語を喋っていると思っような人な、この人の英語は、などと言っても理解されるどころか、かえって変に思われてしまう。それに、翻訳会社も、先の見えない時代に生き残りをかけている中小企業なのだ。

一年が過ぎ、仕事は再び機械や電気を中心になった。幸運の女神は素通りしていつてしまった。

二〇〇九年、アメリカのニュース番組で、ある評論家が、不況にあえぐ中小企業の経営者を相手に詐欺まがいの商法をしている連中がいる、と憤慨した面持ちで語った時、私は、もしかして自分は幫助罪かな、と思った。

さらに一年が過ぎて、ある時、何気なくインターネットで※出版社を検索した私は、アツと驚いた。キーワードとして出てきたのは、詐欺、悪徳情報商材業者、情報漏洩……

さらには、「※出版社はヤバイ」という消費者からの苦情が掲載されていた。

無料小冊子を差し上げます、と言うので個人情報を書き込んだら、注文してもいない商品が送られてきて……、買ってもいないのにカードから引き落とされて……、云々。この世はなんて面白いのだろう。

天才氏も女史も、日本で数ある出版社の中から、似た者



矢尾博子

やおひろこ

1949年 福井県坂井郡（現坂井市）生まれ。カリフォルニア州立大学チコ校、国際関係論学科卒業。東京にて翻訳者、英会話講師として働き、2006年、ふるさとヒーターン。昔から、広々としたところが好き。現在、翻訳者、英会話講師。

争のもと、訳者とチェックカーの二重体制で商品の品質管理をしています。出版社は流れ作業でやっているのかと思うことがあります。ノーマン・メイラー、トニ・モリソン、ウィリアム・グレイター等の二〇世紀アメリカを代表する珠玉の名作、渾身の力作が、英語の勉強とは豆単丸暗記することだと思っような大学生のアルバイトを使っようなと思えるような直訳で、日本語として意味をなさない劣悪な文体になっているのを見ると、ひどいのは※出版社だけではないと思っます。一冊の本からでも、国際化に失敗した日本の姿が見えてきます。

最後になりましたが、今回の優秀賞入選、大変光栄で、嬉しく思っます。文芸思潮の皆さま、選考委員の先生方に、心から、御礼申し上げます。

私の松川事件

高原万里子

Essay

「松川事件って怪しいよね。真相は藪の中のまんま忘れられちゃうんだよね。私、あの事件興味あるんだ」

年若い司書の友人と交した雑談がきっかけになって、私は、福島大学構内にある松川資料室に二ヶ月間通うことになりました。

松川事件に興味があるとはおこがましい、私はほとんど何も知りませんでした。予備知識を仕入れるために広辞苑を開いてみたら、

一九四九年八月十七日東北本線松川駅付近での列車転覆事故。国鉄などの人員整理に反対する共産党員らの暴力行為として党員、労組員らが逮捕されたが、広津和郎らの救援活動が世論を喚起。第一・二審で有罪、六三年最高裁で全員無罪が確定。

無罪になるまで十四年かかっていることと、広津和郎の名を知りましたが、この時点で私はまだ、ヒロツをコウズ

お粗末な知識のまま、旧かな、旧漢字遣いの書簡を解読しに行くうちに、二十名の被告の獄中からの発信は、十五万通を超えていると知って驚きました。

現在よりサイズの小さな葉書に、蟻ぐらいの字が隙間なく書き込まれています。封書であれば、便箋の裏にも文章は綴られています。何の嫌疑で逮捕されたかも知れぬまま獄につながれ、やがて全く身に覚えのない濡れ衣を着せられていることを知った無念は、どれ程書いても書き足りないのでしょうか。

家族に宛て、支援者に宛てて、繰り返し、さらに繰り返しされる「頑張って闘う」の言葉。

一九五〇年十二月の一審判決では、五人に死刑、五人に無期、十人には十五年から三年六ヶ月の刑が言い渡されて後の、五一年の書簡類でした。

虫眼鏡で判読しながら、私は徐々にその時代の彼らの心情に同化されて、迫られてくるような、真摯に向き合えば申し訳が立たぬような気持ちになりました。

文字も文章も拙いのです。でもそこには嘘がない。謀略と濡れ衣で、死刑、無期、有期刑。GHQ主導の共産党潰し、という大雑把な捕え方は、間違っではないにしてもちよつと違うと思えました。

資料室の本を借りて読んで行くうちに、私は、作家広津和郎に辿り着きました。

と読んでいました。その程度の知識しかありませんでした。ころがり込んだ資料整理のアルバイト、長年の疑問にとり組んで、その上お金まで戴けるとは、有難い。

私は、ほくほくして資料室のドアを開けました。

時代遅れの暖簾がかかり、正面のショーケースに二枚の肖像写真、似顔絵が描かれた日本手拭、団扇、末川博名の色紙、記念塔碑文の草稿、スパナとボール。床に置かれた実物のレール。天井までの書架にぎっしりの書籍と書簡、裁判記録。

テーブルの上に載せられた二括りの書簡。開けてみれば、焼け焦げと水染みの跡がありました。

この書簡を燃やしてしまおうとする者がいて、水で火を消して残そうとした者もいたのです。

最初の仕事は、その修復でした。一九五一年、それは私の生まれた年でした。

明治二十四年生まれ、大正・昭和も戦前に主に文芸雑誌に執筆した作家の作品を、私は不覚にも読んだことがあります。

宇野浩二や葛西善蔵と一緒に全集本に入っていることが多いなあ、ぐらいの名前を知っているだけの人でした。

文学好きというのからでなく、懸賞金欲しさに文章を書き始めたという動機が、地に足がついていて大いに気に入りました。

文学青年とか、文学少女とかはろくなもんじゃないというのが私の偏見です。

萩原朔太郎、中原中也、葛西善蔵、太宰治など皆周りの人を不幸にしています。

広津和郎も女出入りはかなり派手な人で、年長の友人志賀直哉を、「広津は、いつも貨物列車を引つ張ってるみたいじゃないか」とあきれさせたといいますが、事実上の妻が残した。良き人に巡りあえて、私の一生は幸せでした。という遺言を見つけて、「一人の女を幸せに出来たということ、男子一生の仕事に値する」と言っ、号泣するのです。

明治生まれの男は、一流のフェミニスト、現代にもこう言い切れる男はざらにはいないでしょう。どんなことがあってもめげずに、忍耐強く、執念深く、みだりに悲観もせず、樂觀もせず生き通して行く精神。

戦時色濃く、軍部の圧力が強くなる中で、散文精神について書かれたこの文章は、今書かれたかのようにみずみずしい。

戦争中は、全くといっていい程執筆せずに、毎日のように志賀直哉と時事批判を語り合っていたと言います。

松川事件はおかしい、と言いつ出したのは、大学の時から友人宇野浩二で、二人は予審の開かれる仙台まで出かけて行きます。

宇野は「文藝春秋」に、広津は「中央公論」に、五三年の二審判決有罪の後には、松川裁判批判に本格的に取り組み、連載は五四回にも及びました。

書画骨董を売り、さらに志賀直哉に借金をしてまでの身銭を切つての一二三回の全国講演。

裁判に桶突く者として、最高裁長官田中耕太郎は激しく指弾。報道界からの冷笑と攻撃で四面楚歌状態の広津に、「君の目に間違いはないね」

「信じていいんだね」と、二度念を押して黙って通帳と印を渡した志賀直哉も、胸のすく程格好良い。

その反対に、講演先で、「なんぼになるんですか？」と卑しい質問をする人がいて、おそらく多数派はこちらだつたでしょう。

その出発が評論だった広津は、徹底したりベラリストでした。

のものだったでしょう。

広津の元を訪れた元被告の一人に、彼は謎めいた言葉をもらしています。

「結局、君ゼロだよ」

人生の幸福は、悔恨なき怠惰という、ツルゲーネフの言葉を好んで、怠け者を自認していた彼をつき動かしたやむにやまれぬもの。

五三年、暮れも押し詰まってから出された二審有罪判決の後、宿の部屋に談話を取りに行った記者が、つと席を立ち、障子の後ろで慟哭する彼を見たと言っています。

他人の痛いのは、百年経っても痛くないとそらとほける輩が大勢を占める中で、広津の虚無感と結びついたやさしさは、ブラックホールのようなものだったでしょうか。

私の虎の巻、広辞苑でブラックホールを引いてみれば、こうです。

高密度で重力があまりに強いために物質も光も放出できない天体。質量の大きな星が一生の最後に自らの重力で崩壊することで生ずる。そのものは観測できないが、周囲のガスが落ち込むときに放出するX線によってその存在がわかる。

宇野浩二、広津和郎、志賀直哉は、没年は違っていても命日は同じです。私が住む山里では、彼岸花がかがり火のように咲き連なります。

特定の主義・思想、セクトに寄りかかろうとするのは弱さだと看破し、あくまでも自身の感受性を信じて、万人に向けて理論化して行くのです。

労働運動でも、学生運動でも、核軍縮運動でも、必ず分裂していきます。右派、左派、中道と、傍目には白けるだけのことを繰り返して阿呆らしいばかりです。

ペン一本を武器にした松川裁判批判は、やがて波紋のようにはたがり、静かに深く世論を動かして行くのです。この過程は感動的です。

憲法に掲げられた三権分立を建前だけのものに終わらせず、あたり前の司法の独立を諄々と説いて、しかも資料は裁判記録のみでした。

自らが積み上げた裁判記録の矛盾で、司法自体が裁かれた形になりました。

革命だと思いました。毛沢東やトロツキー、ゲバラだけのものではなく、血腥いものでもありませんでした。

臭いものに蓋をして、見て見ぬ振りをする、出る杭にならず、長いものに巻かれることが大人の態度とされ、美德となる国で、還暦を過ぎた広津和郎は、リウマチで痛む足にスリッパを括りつけて動き続けるのです。

全員無罪判決の出た後に、引き受けていた松川事件対策協議会会長を早々に退任します。

おそらく、長の名に甘んじていたのはこれが最初で最後九月二十一日の彼岸花を、私は今年から静かな思いを持って見るでしょう。



高原万里子

受賞の言葉

高原万里子

松川事件文集「真実は壁を透して」の中に西山安雄氏の名前を見出した時、私の胸の中に小さな驚きと納得が拡がりました。

昔、私は西山氏の主宰する同人誌「散文芸術」に係わったことがあります。「散文芸術」は、広津和郎が三十代の時に有島武郎との論争で使った言葉でした。西山氏は、松川事件裁判批判に一途に取り組み広津和郎に、心からの賛同を籠めて、「散文芸術」を冠した同人誌を創刊したに違いないのです。

私は、敬愛する広津和郎を知るずっと以前から、因縁の糸の端っこの端っこの方をかすっていたわけなのです。まるで個人的な逸話ですが、受賞の言葉にさせていただきます。